

上原城下町遺跡

——平成16年度茅野市播磨小路土地区画整理事業に伴う
緊急発掘調査報告書——

2005. 3

茅野市教育委員会

UEHARAJYOKAMACHI-SITE

上原城下町遺跡

——平成16年度茅野市播磨小路土地区画整理事業に伴う
緊急発掘調査報告書——

2005. 3

茅野市教育委員会

序 文

このたび、茅野市播磨小路土地区画整理事業の実施に伴い、発掘調査を茅野市教育委員会が行いました。

上原地区には武田信玄の信濃においての拠点である上原城があります。上原城は全国的に知られている山城で、古くから重要な遺跡として知られ、長野県史跡に指定されています。今回発掘調査を行った場所はこの上原城のすぐ下にあり、中世の城下町の検出が期待されました。その結果、城下町の一端を知る良好な成果が得られたと思われます。

また、西方堂という近世の念仏堂が検出され、堂守と思われる人々の墓地も出土しました。西方堂は昭和33年に取り壇されてしまいましたが、石造物も残されており、江戸時代の庶民信仰を考える上で興味深い史料を得ることができました。

本遺跡は、文字史料と考古史料により地域の歴史を考えることができる非常に貴重な遺跡であるといえます。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの関係諸機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成17年3月

茅野市教育委員会

教育長 牛山 英彦

例　　言

1. 本書は、茅野市播磨小路上地区画整理組合理事長 柳沢侃と茅野市長 矢崎和広との間で締結した「茅野市播磨小路上地区画整理事業上原城下町遺跡発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した上原城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市播磨小路上地区画整理組合よりの委託金を得て、茅野市教育委員会が平成16年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第1節5として記載してある。
3. 発掘調査は平成16年4月7日から平成16年7月15日まで、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成17年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの担当者は柳川英司である。本書の執筆は柳川が行った。
5. 調査区の基準点は世界座標系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
6. 土層に色調については『新版標準土色帳』の表示に基づいて示した。
7. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市尖石繩文考古館で収蔵・保管している。

凡　　例

本書の図で用いたスクリントーンや記号の意味は下記のとおりである。

遺構内のドット

△ 繩文時代

▲ 弥生時代

○ 古墳時代

● 平安時代

● 中世

○ 近世

目 次

序 文

茅野市教育委員会教育長 牛山 英彦

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 発掘調査の経過.....	1
1. 発掘調査の事務経過.....	1
2. 調査区の設定.....	1
3. 発掘調査の経過.....	1
4. 調査日誌（抄）.....	1
5. 調査組織.....	2
第Ⅱ章 遺跡の概要.....	3
第1章 遺跡の概観.....	3
1. 遺跡の立地と地理的環境.....	3
2. 遺跡の研究史.....	3
3. 周辺の遺跡.....	3
第Ⅲ章 発掘された遺構と遺物.....	7
第1節 遺跡の層序.....	7
第2節 発掘された遺構.....	8
1. 方形略穴.....	8
2. 上坑.....	9
3. 井戸址.....	12
4. 捵立柱建物址.....	12
5. 墓.....	21
第3節 発掘された遺物.....	22
1. 縄文時代.....	22
2. 弥生時代.....	22
3. 古墳時代.....	24
4. 平安時代.....	25
5. 中世.....	25
6. 近世.....	27
第Ⅳ章 調査の成果と課題.....	30
第1節 中世の上原城下町遺跡の様相.....	30
第2節 西方堂址について.....	31
第Ⅴ章 結語.....	33
付表.....	35
写真図版	
抄録	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の経過

1. 発掘調査の事務経過

平成16年4月6日 「茅野市播磨小路地区画整理事業上原城下町遺跡発掘調査委託」を茅野市長 次崎和広と茅野市安国寺姫宮上地区画整理組合 理事長 柳沢侃との間で締結し、委託金6,200,000円で発掘調査を行うことになった。

平成17年2月22日 遺構密度が低かったため、事業費を3,420,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

2. 調査区の設定

調査に先立ち、平成14年11月に茅野市播磨小路地区画整理事業地内の試掘調査を行った結果、中世から近代にいたる時期の遺物を検出した。これにより事業地内の発掘調査範囲を確定した。この時、遺物はかわらけや瀬戸製陶器・輸入磁器が出土した。その後、茅野市教育委員会と茅野市播磨小路地区画整理組合設立準備会（当時）・茅野市都市整備課との間で協議がもたれ、平面設計が決定していないことにより、確実に工事により削平されることが予想される道路敷部分の発掘調査を行うことになった。区画内については平面設計が決定し次第再協議することになった。調査面積は800m²である。

グリッドについては調査範囲内に設定し、遺跡の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、世界座標x = 806.006、y = -32217.288を基準点とし、この基準点から一辺5mのグリッドを設定した。ベンチマークは776.208mである。

3. 発掘調査の経過

表土剥ぎを4月7日から開始し、発掘調査を終了したのは6月23日だった。発掘調査を行う区画がJR東日本中央東線に隣接しているため、東日本旅客鉄道株式会社長野支社と事前協議を行った。遺構実測のための基準杭設置は、面地測量株式会社に委託し、5月18日に行った。発掘期間中、何度か降雨に遭い、遺構確認面が粘土のため水が引かず、調査は困難を極めた。現場での発掘調査は6月23日に終了し、その後調査区の埋め戻しや周辺の事後調査を行い、最終的に終了したのは7月15日であった。

4. 調査日誌（抄）

4月7日	表土剥ぎ開始。	あるのを確認した。5区の発掘を始める。
4月8日	作業員を入れて遺構確認。	4月22日 先日来発掘を行っている黒い落ち込みは土坑だった。5区の遺構確認。ここから井戸址と思われる集石（井戸址2）と柱穴が確認される。
4月12日	5区の表土剥ぎ。	
4月16日	1区の黒い落ち込みを掘り始める。	
4月20日	昨日の雨で現場が水没しになっており、水がなかなか引かず。	4月23日 西方堂の石造物の移転に立ち会う。午後から西方堂址の表土剥ぎ。木箱や大きな桶状のものを検出（墓1・2・3）。
4月21日	遺構確認。粘土層の下は青色の砂混じりの粘土層であるが、所々に黒い落ち込みが	

5月6日	5区のピットを掘り始める。ここ数日の雨で現場内の水が増水し、なかなか引かなくなった。	6月9日	1号墓の発掘を終える。2号墓の発掘に取りかかる。
5月14日	井戸址1から先端が筒状の棒が出土した。西方堂址からはこれまで見つかっていた3本の木柱の他に、更に2本が見つかった。	6月10日	甲府市教育委員会 佐々木満氏来跡。
5月18日	基準杭設置のための測量を行う。	6月14日	2号墓の発掘終了。3号墓の発掘開始。3区の調査ほぼ終わる。
5月21日	5区を掃除して写真撮影。	6月15日	諏訪市教育委員会 青木正洋氏・中島透氏来跡。3区の写真撮影。
5月24日	西方堂址から宝珠と思われる石造物が出土した。この石造物とともに多くの礫が出土している。小松有希子氏来跡。	6月16日	1・2・3号墓の棺桶を取り上げる。
5月25日	昨日五輪塔の一部と思われる遺物が出土したところを発掘すると、水鉢が半分割された状態で出土した。	6月17日	3号墓の脇から墨青のある木札が出土した。1・2区の土層断面図を作成する。信濃毎日新聞社の記者の取材を受ける。
5月27日	35~40号土坑の写真撮影。	6月18日	西方堂址の写真撮影。墓から出土した副葬品を洗浄して写真撮影。
5月28日	40号土坑の掘り下げを行う。2区と3区の間の砂の中から多くの遺物が出土。	6月19日	茅野市播磨小路区画整理組合と上原区で出土した遺体の供養を行う。供養は頬岳寺の住職が行った。
6月3日	信州大学人文学部教授 笠本正治教授来跡。	6月22日	長野日報社の記者の取材を受ける。最後に遺跡全体の写真撮影を行う。
6月4日	諏訪新聞社記者の取材を受ける。	6月23日	撤収作業を行う。
6月7日	西方堂の桶を発掘したところ骨が出土し、鳥となった。	6月28日	遺跡の埋め戻しを行う。
		7月15日	西方堂址の事後調査を行う。

5. 調査組織

調査主体者	西角源美（教育長）（～平成16年9月30日）牛山英彦（教育長）（平成16年10月1日～）
事務局	宮坂耕一（教育部長）
	文化財課 小平廣泰（課長）
	文化財係 守矢昌文（係長） 小池岳史 百瀬一郎 柳川英司 大月三千代
調査担当者	柳川英司
発掘調査・整理作業員	小猿千秋 清水里苗 武居八千代 東城深雪 野澤みさ子 原 徳治 北条嘉久男 森 浩子 柳沢 宏

発掘調査期間中と遺物整理期間中、茅野市播磨小路土地区画整理組合ならびに地権者の方々にご助力をいただき調査を円滑に進めることができた。謝意を表したい。また、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事上田典男氏をはじめ、下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

宮坂充昭 会田 進 小坂英文 山田武文 宮坂 清 田中慎太郎 高見俊樹 青木正洋 五味裕史
中島 透 河西克造 小松隆史 小松有希子 笠本正治 佐々木満 小林純子 小林光男

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の立地と地理的環境

上原城下町遺跡(224)は茅野市中の上原1442他に所在する。この場所は茅野駅から約1kmに位置している。本遺跡は永明寺山麓の上川による低位段丘面に位置している。永明寺山は花崗閃緑岩で構成されており非常に陥る。遺跡の西側には国道20号線が、東側には中央東線が走っている。周辺は歴史的に重要な場所であり、東側には上原城跡があり、その麓には諏訪高島藩主の菩提寺の一つである頬岳寺がある。甲州街道の位置は明確ではないが、西方堂にある江戸期の秋葉大明神の灯籠が国道20号線拡幅に伴って移転したところからおそらく現在の国道20号線が甲州街道であったのではないかと思われる。また、上原区の南西側で甲州街道から分岐する「山浦道」があり、諏訪方面から八ヶ岳山麓へ抜ける交通の要衝であった。

2. 遺跡の研究史

上原城と上原城下町は古くから文献史料による研究がなされていたが、発掘調査は近年になって行われるようになった。上原地区で大正13年刊行の『諏訪史』第一巻から見られる遺跡は、十二坊・永明寺・原田・大町・葛井平・ハリマ小路・和尚ヤシキ・柿ノ木平・頬岳寺付近の9遺跡である。確認できた遺物は土器・石鎚・打石斧で弥生の物が多く出土しているとの記述がある。現在の『茅野市遺跡地図』では上原城下町遺跡の範囲を広く捉え、大町・原田・葛井平・ハリマ小路・頬岳寺付近は上原城下町遺跡内になっている。『信濃史料』第一巻上には、上原は助ヶ端(光明寺)・永明寺(十二坊)・地蔵堂(葛井)の3遺跡だけとなり、繩文中期後半・後期の土器・石器・土陶器・須恵器が出土している。今回調査を行った遺跡は、『諏訪史』第一巻の「ハリマ小路」と考えられる。ここでは「石鎚・土器」とだけあり、繩文が弥生の遺物が検出されたようだ。

本格的な発掘調査は、昭和57年の試掘調査が初めてで、茅野市史編纂事業の一環として板垣平遺跡(285)の調査が行われた。この時の調査では2面の文化層と礎石建物址3棟と石垣が検出された。上層が武田氏時代で下層が源氏領家時代と考えられる。平成2年には鉄塔建替工事に伴って板垣平遺跡の調査が行われ、昭和57年の調査同様2面の文化層と掘立柱建物址が検出された。平成2年6月には上原地区の区间整理事業に先立って詳細分布調査が行われた。遺構としては西方堂址周辺で近世の水田の跡が、六句地区では建築物の基礎にわたる石列が検出されている。遺物では中世から近・現代に至るまでの土器・陶磁器が得られている。平成16年12月末までに、個人住宅等の立会調査を42ヶ所行っているが、建築物の基礎が遺構面まで到達しなかったり擾乱を受けていたりして遺構や遺物が検出されることはない。その中の10ヶ所で遺構が確認されている。弥生時代の住居址2軒・古墳時代の住居址1軒・平安時代の住居址2軒・土坑71基・中世の造成面・溝・近世の暗渠・石垣を検出している。中世の溝は屋敷地や町の区画として作られたのではないかと思われる。

3. 周辺の遺跡

上原城下町遺跡周辺の遺跡は発掘事例が少なく、内容がわかる遺跡が少ない。そのため、和尚屋敷(316)・地蔵堂(104)・光明寺(109)や古墳群については詳細は不明である。小規模ながら発掘調査を行った遺跡について述べる。なお、板垣平(285)については2で述べたのでここでは触れない。

永明寺（101） 平成7年に市道改良工事により発掘調査を行った。このときは造成面3面と石垣・ピット1基を検出している。遺物は縄文中期後葉土器1・黒耀石2・打製石斧1・古墳時代高环片1・平安時代黒色土器片2・中世のカワラケ・内耳土器・鉄軸天目茶碗・稜皿・丸皿・折線皿・青磁香炉・甕の破片が出土している。永明寺は守矢文書中の『大祝職位事書』天文7年（1538）2月3日の条に、「二月三日ニすてに御即位に及び、御馬にめし候時、有賀殿・真志野殿・小坂殿会下永明寺の住寺（持）を頼み申、」とあり、古くからあった寺院であることがわかる。

上原城跡（102） 上原城は永明寺山塊に属する張り出した山の頂上にある。頂部の標高は978mで、板垣平遺跡からの比高差は133m、上原城下町遺跡からの比高差は202mである。現在、上原城には金刀比羅が祀られている。金刀比羅社から西の方向を見ると、対面する守屋山塊の麓に源訪上社前宮・本宮を望むことができる。現在は木が生い茂っていて視界があまり広くないが、城が使用されていた頃には、遠く富士山や源訪湖がよく見えていたに違いない。発掘調査は行われていないが、主郭・二の郭・三の郭と堅堀が残されている。上原城主の居館は、前述の通り山腹にある板垣平遺跡であると思われ、更に家臣団や庶民の居住する場所が上原城下町遺跡であると考えられる。

阿弥陀堂（222） 阿弥陀堂遺跡は、過去数回にわたり発掘調査が行われている。そのうち、まとまって遺構が検出された3回の発掘調査について述べる。昭和57年に茅野市有料道路及び都市計画街路建設により発掘された。この時には、縄文時代中期後半の住居址3軒・弥生時代後期の住居址12軒・土坑1基・平安時代の住居址23軒・掘立柱建物4棟・柱穴列1列・溝状遺構4条が検出された。中世の遺構は検出されなかったが、多くの陶器が出土している。特筆すべきは、溝状遺構の一つから八棱鏡が4枚出土していることである。平成4年には店舗建設に伴って発掘調査を行い、縄文時代中期後半の住居址5軒・弥生時代の住居址5軒・平安時代の住居址5軒が検出されている。平成5年度には工場建設に伴い発掘調査が行われた。縄文時代中期後半から後期にかけての住居址5軒・弥生時代の住居址1軒・平安時代の住居址6軒・掘立柱建物址3棟・土坑81基・水田址が検出された。以上の成果をまとめると、縄文時代中期後半から後期の住居址13軒・弥生時代の住居址19軒・平安時代の住居址33軒・掘立柱建物址4棟・柱穴列1列・溝状遺構4条が検出されたことになる。阿弥陀堂遺跡は非常に長い間人々の生活が営まれた遺跡で、茅野市域における弥生時代以来中心的な遺跡だったことがわかった。

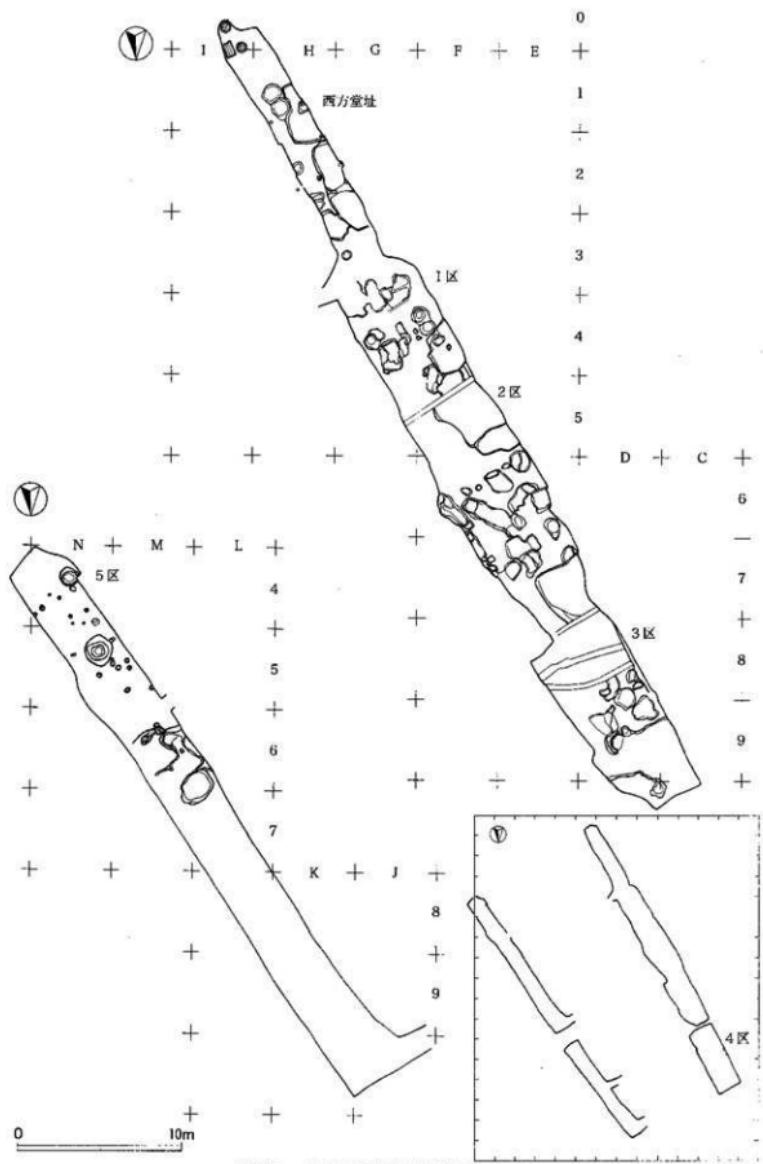
構井（223） 昭和57年に茅野市有料道路及び都市計画街路建設により発掘された。遺構は弥生時代の住居址1軒・古墳時代の住居址1軒・平安時代の住居址1軒を検出している。この遺跡は阿弥陀堂遺跡と関連する遺跡と思われる。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 上原城下町遺跡位置図 (S=1/1500)



第3図 上原城下町遺跡全図 (S=1/300)

第三章 発掘された遺構と遺物

第1節 遺跡の層序

試掘調査時に10ヶ所のグリッドを設定して遺構の確認を行った。また、調査時に遺構の上層観察を行うとともに、各調査区の土層観察も行った。これらの成果に基づいて本遺跡の層序について述べていきたい。

グリッド1・4区（第2・4図） 調査区の北部に位置する。本遺跡の耕作土は非常に薄く、グリッド1では水田床土面まで15cmほどしかない。6層以下からは多くの砂を含む層が検出され、10層になると完全に粘土層になる。10層の上部ぐらいで水が湧き出してくる。

グリッド7（第2・4図・図版1-3） 調査区のはば中央部に位置する。耕作土は27cmで、遺物包含層は4・5層である。中世のカワラケと内耳土器が出土している。

グリッド8（第2・4図） 調査区の西側に位置する。グリッド8・9・10は本発掘のときには外れたため、試掘調査の成果でしか内容はわからない。グリッド8の耕作土は17cm程度で、2層中から古墳・中世・近世の遺物が出土している。それ以下の層からは何も検出されなかった。

グリッド9（第2・4図・図版1-4） 遺跡の最西部に位置する。耕作土は18cmである。このグリッド9の3層中からは多くの内耳土器の破片が検出されている。6層は味噌土と呼ばれる鹿沼土のような層であり、遺構確認面が粘土層である本遺跡では珍しい。本発掘時に他の場所で粘土層を発掘したが、粘土層が統くばかりで味噌土の層は発見できなかった。

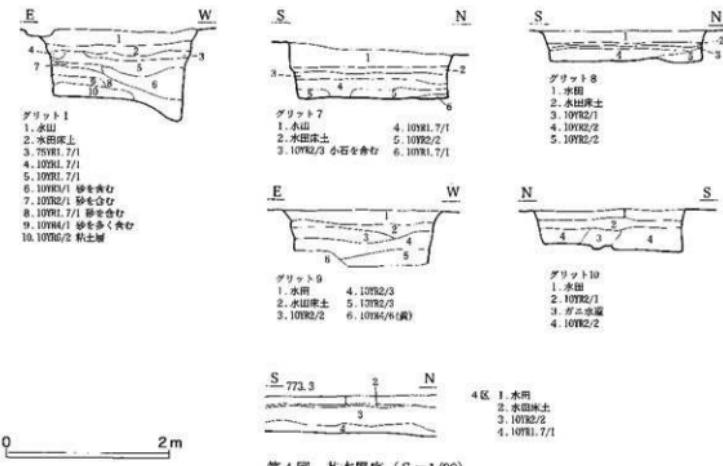
西方堂址（第5図） 西方堂址は現道の播磨小路にレベルを合わせるためか、盛り土がなされていた。この盛り土内から多くの近世から近代にかけての遺物が検出された。盛り土の厚さは最も厚い部分で60cmにも及ぶ。その下の5層から7層は非常に堅緻であるため、盛り土以前の表土ではないかと考えられる。29層以下は砂や粘土を多く含み、32層が地山の粘土層であると考えられる。地表面から粘土層まで90cmの厚みがある。

1・2区（第6・7図） 耕作土の厚さは42cmと厚い。遺物の包含層は2層以下で、遺構以外では2層以下からの遺物の出土はない。耕作土である1層は、途中で4層になるが、これは現代の水田の区画によるものか。地山の粘土層は19層以下であり、砂を大量に含む青灰色の粘土である。

3区（第8図） 2区までの水田と異なり、3区は1段下がっており、それに伴って耕作土が若干薄くなっている。耕作土の厚さは1・2層で39cmほどである。遺物包含層は3層である。4層は粘土層になり、遺構確認面まで55cmである。

5区（第9図） 1～2層は耕作土で遺物包含層は4・6層以下である。85号土坑は6層の中から掘り込まれており、3層からの掘り込みは見られないところから、中世の生活面が6層であることがわかる。井戸址2の集石が攪乱を受けておらず、集石上面がはば3層の高さであるところから、中世の生活面はあまり削平を受けていないことになる。また、30号土坑のあるところまでは、これまで見てきたような粘土層ではなく、若干小石の混じるローム層で安定した層であった。ここだけは水に浸からなかった。31・32号土坑がある北西側から水の湧水量が多く、水が引くことはなかった。

以上見てきたとおり、西方堂址・1区～4区までは地山が粘土層で、非常に水が湧き出るところであった。水が湧き出ると言っても、雨が降ると数日して水が引くという状況であるため、周辺の雨水がこの粘土層の本遺跡に集まって来ると言うことなのだろう。5区の大部分も同じ状況であるが、僅かに南東側に安定したロームの面があったことがわかった。



第4図 基本層序 (S = 1/80)

第2節 発掘された遺構

遺構は方形堅穴・土坑・井戸址・掘立柱建物址・墓が検出された。しかし、遺構中から遺物は出土するが様々な時代の遺物が混入しており、時期を確定できる遺構は少ない。中世までの遺物が出土する遺構は中世としたが、古墳時代や平安時代の遺物のみの遺構は判断を保留した。掘立柱建物址と墓は、出土遺物や遺構・遺体の状況から近世の遺構であると判断した。

1. 方形堅穴 方形堅穴は基検出された。

1号方形堅穴（第5図・図版4-3）西方堂址グリッドH-1・2に位置する。旧番号は46号土坑。48号土坑に切られる。遺構内に掘立柱建物址の柱穴77号土坑と木柱があり、掘立柱建物址の方が新しい遺構である。遺構の大部分が調査区外であるため規模は不明であるが、374cmの短辺がわかっているので、結構大きな遺構であると思われる。深さは53cmである。遺構の掘り込みは25~27層以下からで、それ以上は後世の生活面である。遺構内からカマドなどの施設ではなく、生活を伺わせる痕跡は検出できなかった。遺構の北側から織がまとまって出土しているが、焼成を受けた痕跡ではなく、カマドの構築材としての織ではないと考えられる。遺物は古墳時代土器壺1点・須恵器壺1点・平安時代土器壺2点・中世手捏ねカワラケ1点・カワラケ1点・瓦器1点・時期不明土器質土器4点が出土している。最も新しい出土遺物が中世のカワラケであるところから中世の遺構と考えられる。

2号方形堅穴（第5図・図版4-4）西方堂址グリッドG・H-2に位置する。旧番号は50号土坑。1号方形堅穴に切られ、3号方形堅穴を切っている。掘立柱建物址の木柱が本遺構内から検出されており、本遺構より新しいと思われる。遺構の大部分が調査区外のため遺構の規模は不明であるが、上端が312cm以上あると思われるところから比較的大きな遺構と考えられる。遺構は23層以下で、深さは54cmである。遺構内からは20cmの平石が検出されたのみで、他に遺構は検出されなかった。出土遺物は平安時代の黒色土器片が1点出土している。遺構の時期は1号方形堅穴に切られているところから、1号方形堅穴より古い時期の遺構と

考えられる。

3号方形堅穴（第5図・図版4-4・5） 西方堂址グリッドG・H-2・3に位置する。旧番号は51号土坑。重複関係は2号方形堅穴に切られ、4号方形堅穴を切っている。深さは30cmであり、31層がこの遺構の包含層であると思われる。遺構の大部分が調査区外に出ているため、規模は不明である。遺構内からは遺物は出土していない。

4号方形堅穴（第5図・図版4-4・5） 西方堂址グリッドG・H-3に位置する。旧番号は54号土坑。重複関係は3号方形堅穴に切られている。遺構の大部分が調査区外に出ているため規模は不明であるが、1～3号方形堅穴に較べれば小型である。深さは10cmと浅い。

5号方形堅穴（第6図・図版4-7・5-2・3） 1区グリッドF-4に位置する。旧番号は38号土坑。遺構の大部分が調査区外になっているため、遺構の全貌は不明であるが、判明している規模は北東側壁面27cm・深さ12cmである。実際の深さは、8・10層が本遺構の包含層であると考えられるところから、36cmであると思われる。本遺構の南東側が不整形になっており、それを37号土坑とした。また、その中にある長方形の上坑を40号上坑とした。本遺構との関連性がよくわからないが、37号土坑が9層で本遺構を切っていると思われるところから、別の遺構ではないかと考えられる。さらに、40号土坑の上部の縁が擾乱を受けずに残っていたところから、37・38より新しい遺構と思われる。5号方形堅穴中心部からビット状の土坑を検出している。本遺構に付属する遺構とも考えられるが、付近にある34・36・39b・82土とも関連する遺構であるとも考えられる。遺物は遺構床面から6cm浮いた状態で出土している。ある程度遺構を埋めたか埋まった状態で遺物が覆土中に入ったのだろうか。出土した遺物は、古墳時代土師器壺1点・須恵器壺1点・蓋1点（第12図4）・壺2点・平安時代黒色土器壺2点・灰釉陶器瓶1点・中世カワラケ2点（第12図5）・内耳土器2点・時期不明上師質土器12点である。遺物から中世の遺構と考えられる。

6号方形堅穴（第6図・図版4-7） 2区グリッドF・E-5に位置する。遺構の大部分が調査区外に出ているとの41号土坑と近世以降のガニ水道に切られているため遺構の規模は不明であるが、南東-北西方向が約300cmであるところから、比較的大きな長方形の遺構であると思われる。深さは10cm程度でかなり浅い。出土した遺物は縄文土器1点・弥生土器高杯1点・古墳時代土師器壺1点・壺1点・平安時代灰釉陶器壺1（第13図8）・中世カワラケ3点・瀬戸美濃系山茶碗1点・瀬戸美濃系捏ね鉢1点・時期不明上師質土器21点である。出土遺物から中世の遺構の可能性がある。

7号方形堅穴（第7図・図版6-1） 2区グリッドD・E-7・8に位置する。旧番号は67号土坑。66号土坑を切っている。遺構の西側は調査区外であり、北側は近世以降のガニ水道により切られていて遺構の規模は不明だが、遺構の北東側が340cm以上で比較的大きな遺構である。遺構の包含層は5・16層で深さは42cmである。遺構内からは15cm～36cmの大縁が数点検出された。また、木の棒が出土している。遺構内からは内耳土器片が出土している。出土した遺物は弥生土器1点・中世カワラケ2点・内耳土器1点・時期不明上師質土器3点である。出土した遺物から中世の遺構と考えられる。

2. 土坑

土坑は遺跡全体で91基を検出している。土坑を分類すると次のⅤ群に分けることができる。

第Ⅰ群：平面形が方形・隅丸方形・隅丸長方形の土坑。小型の方形堅穴の様な形状。断面形は樽・盤・皿形と様々である。7a・7b・31・32・43a・46・61a・63・73a・74・87・88号土坑がこの群に含まれる。

第Ⅱ群：平面形が長方形又は隅丸長方形・橢円形で、大きさが100cm以下の土坑。断面形は樽形が多いが、不整形もある。52・53・55・57・59・61b・62・65・66・68・69号土坑が該当する。

第Ⅲ群：平面形が長方形で大きさが120cm以上の土坑。42・64号土坑が該当する。

第Ⅳ群：平面形が円形か不整形で、断面形が巾着状の土坑。1a土・1b土・3a土・4土・35a土・39土が該当する。

第Ⅴ群：平面形が円形か不整形で、断面形が樽形か盤形の土坑。IV群と平面形は共通するが、断面形が異なる。44a・35b・71号土坑が該当する。

第VI群：掘立柱建物址の柱穴と考えられる、小規模な土坑。今回の調査では32基の柱穴と思われる土坑を検出した。柱穴は5区を中心に検出され、掘立柱建物址があったことが推定されるが、調査区が狭いため明確に掘立柱建物址のプランを確認できるまでは至らなかった。土坑の大きさは、口径14cm～56cmと幅広いが、中心となるのは20～40cmの大きさのもので平均は26cmである。深さも6～40cmと幅広いが、中心は10～20cmで、平均は11cmである。遺構内から遺物が出土することはほとんどないが、27・34号土坑からカワラケが出土している。

第VII群：平面形が細長い溝状の土坑。本来ならば溝状遺構として新たに項を設けるべきであるが、明確に溝状遺構と判断できず、便宜的に土坑の中に含めた。41・60号土坑が該当する。

以下、各群に代表的な土坑について述べる。

I群

7号土坑（第7図） 2区グリッドF-6・7に位置する。遺構内に方形の土坑がありaとbに分けられる。aはbに付属する遺構の可能性がある。aは遺構の大部分が調査区外であり、さらに北側が擾乱を受けているため遺構の規模は明確ではないが、上端長軸は約188cmである。形状は長方形の小型の方形砾穴のプランを呈する。bは上端が約60cmの小型である。出土した遺物は平安時代黒色土器壺1点・中世青磁碗1点・時期不明土師質土器1点である。時期は中世青磁碗が出土しているところから中世であろう。

63号土坑（第7図） 2区グリッドE-6・7に位置する。4・62・64・65号土坑と重複している。4・64・65号土坑に切られている。平面形は隅丸方形で上端長軸134cm・短軸126cm・下端長軸132cm・短軸106cmである。出土した遺物は古墳時代須恵器壺1点と時期不明土師質土器1点である。

II群

52・53号土坑（第5図・図版4-4） 西方堂址グリッドH-2に位置する。53号土坑は52号土坑を切っている。遺構の大部分が遺構の外に出ているため規模はよくわからないが、判明している部分では52号土坑の上端長軸は72cm・深さ12cm、53号土坑は上端長軸50cm・深さ23cmで小型である。平面形はともに橢円形で断面形は樽形である。出土遺物は上師質土器1点だけである。

59号土坑（第7図・図版5-8） 2区グリッドE-6に位置する。60・61a号土坑と重複している。60号土坑を切っているが、61a号土坑に切られている。上端長軸104cm・深さ54cmである。平面形は橢円形で断面形は樽形である。出土遺物は時期不明の土師質土器1点である。

III群

64号土坑（第7図） 2区グリッドE-7に位置する。63・65号土坑と重複しており、63・65号土坑を切っている。上端長軸134cm・短軸60cm・深さ18cmである。平面形は長方形で断面形は皿形である。土坑中央部から20cm大の平石が検出された。出土した遺物は中世瀬戸美濃系捏ね鉢1点・時期不明の上師質土器1点である。

IV群

1号土坑（第6図・図版4-6） 1区グリッドG-4に位置する。本遺構は北側のaと南側のbと二つの遺構から成立している。aがbを切っていると思われ、aの方が新しい遺構である。aの上面プランは不整形で上端長軸100cm・短軸90cm・深さ54cmである。断面形は一部巾着形である。遺構内部から古墳時代須恵器坏片とカワラケ（第12図6）・内耳上器片（第12図11）が出土しているが、いずれも覆土の高いところから検出している。遺物から中世の遺構であると思われる。aとbの中間に木片が数枚検出された。おそらくaに属する遺物ではないかと考えられる。bは元々隅丸長方形の遺構ではなかったかと思われるが、遺構の一部がaに切られて無くなっているため不明である。わかっている部分では上端100cmで深さは46cmである。断面形は巾着形である。土坑の分類では第IV群であると思われる。

3号土坑（第6図） 1区グリッドG-4に位置する。2号土坑と重複する。全体を見ると長方形のプランを持つ遺構ではあるが、その内部の掘り込みからa・b・cと3つの土坑から成立していると思われる。そのうち中心になるのはaで、平面形は不整形で、上端長軸156cm・短軸76cm・深さ46cmである。断面形は一部巾着形になっている。遺構の形状は第IV群に属すると思われる。内部からの遺物の出土量は多く、古墳時代須恵器壺片1点・カワラケ3点・中世東濃窯瓶片1点・時期不明土師質土器片6点が出土している。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

4号土坑（第7図・図版5-7） 2区グリッドE-7に位置する。63号土坑と重複する。上端長軸推定122cm・短軸100cm・深さ30cmである。平面形はおそらく方形で断面形は巾着形である。土坑の北側には鋤の工具痕が見られる。出土した遺物は古墳時代土師器1点・近世磁器1点・時期不明土師質土器1点・天宝元年宝一枚である。

35a号土坑（第6図・図版5-1） 1区グリッドF・G-1に位置する。35b号土坑と重複する。平面形は円形で断面形は一部巾着形になっている。遺構の規模は上端長軸114cm・短軸108cm・深さ36cmである。出土遺物は古墳時代土師器壺1点・中世カワラケ1点・内耳土器1点・近世陶器4点・嘉祐通宝1枚である。近世の陶器が出土しているが、遺構上部から出土したため、遺構の時期は中世であると考えられる。

V群

44a号土坑（第7図） 2区グリッドE-6に位置する。44b号土坑と重複している。平面形は若干不整形な円形で、断面形は樽形である。上端は約80cmほどの円形であったと思われる。深さは32cm。出土遺物は古墳須恵器壺1点・平安時代黒色土器壺1点である。

VI群

85号土坑（第9図） 5区グリッドM-5に位置する。掘立柱建物址の柱穴と考えられる。この柱穴は6層中から掘られており、この遺構の近くにある柱穴群も本来遺構確認面より高い位置から掘り込まれていたと思われる。

VII群

41号土坑（第7図・図版5-4） 2区グリッドF-5に位置する。6号方形堅穴を切って構築されている。遺構の大部分が調査区外にあるため、規模は不明であるが、形状から盃状の遺構になるのではないかと考えられる。遺構の幅は168cmで深さは39cmである。この遺構の包含層は13~15層である。遺物の大部分は遺構上部から出土しており、最も下から出土した遺物は中世の遺物であるが、遺構床面から30cm上部から出土している。その他の土坑 40号土坑に類似する土坑は他ではなく、5号方形堅穴に付属する遺構の可能性もあるので、便宜上本項で述べる。また、47・48号土坑は近世の土坑と明確に判断できるためここで述べることにした。

40号土坑（第6図・図版5-2・3） 1区グリッドF-4に位置する。5号方形堅穴のところで述べたように5号方形堅穴と重複し、最も新しい段階の遺構となる。遺構の上面に15cm~30cm大の礫で集石が形成され

ており、その下部から57cmの平石が上坑を蓋する形で検出された。土坑は上端長軸73cm・短軸42cmの長方形で、深さは51cmで深く掘り方もよい。37号土坑との関係は不明である。土坑中から遺物は確認されていないが、集石とその周辺から古墳時代の高坏片1点（第12図3）と中世のカワラケ片1・内耳土器片10点・搞き石2（第12図14・15）が出土している。

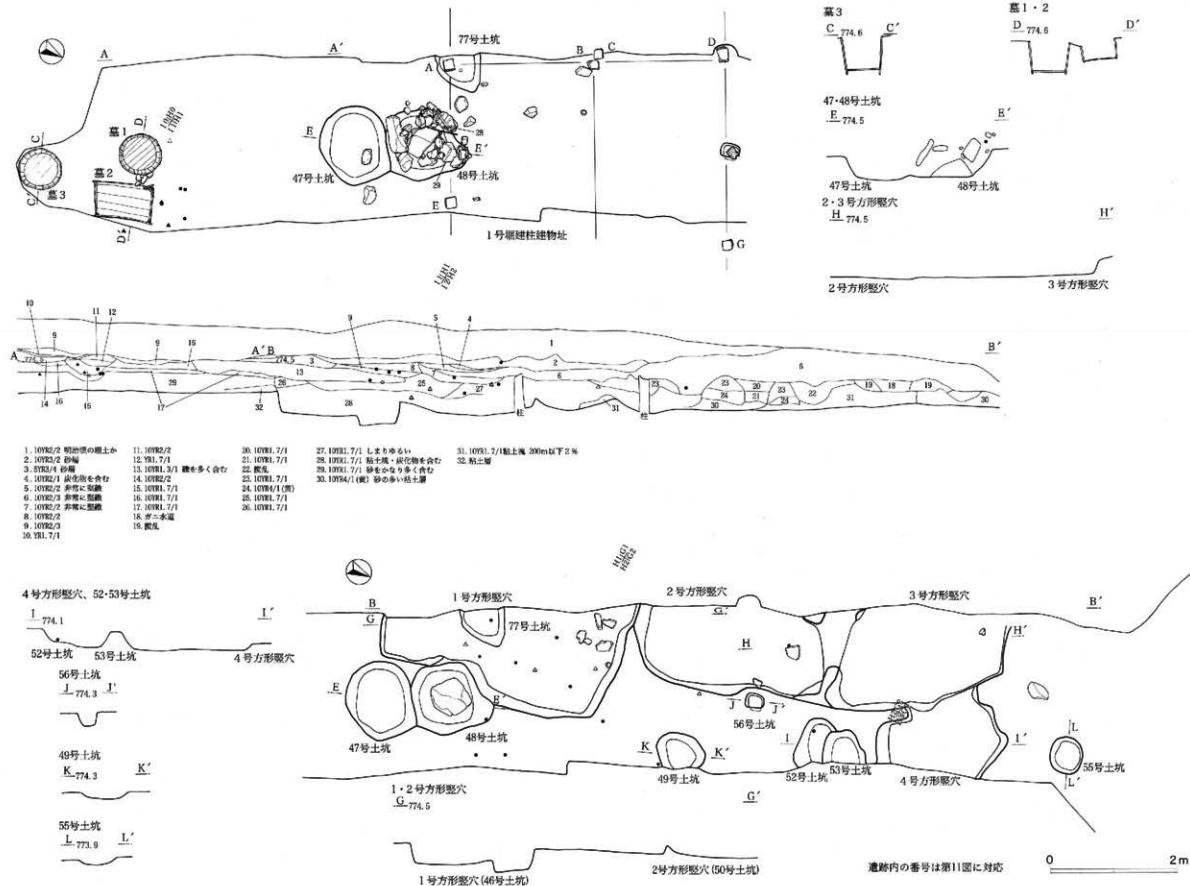
47・48号土坑（第5図・図版3-9・4-1・2） 西方堂址グリッドH-1に位置する。新旧関係は47号土坑の方が新しい。48号土坑内から砂が検出されたところから、近代の盛り土以降の遺構か。遺構の規模は47号土坑の上端長軸126cm・短軸104cmの長方形で深さ44cm、48号土坑は上端長軸132cm・短軸112cmのやや方形で深さ37cmである。48号土坑の内部に多数の10cm~60cm大の砾が入れられている。その中に石製の宝珠（第11図28）と石製の水鉢（第11図29）、それから廃棄された花束が含まれていた。西方堂を破却した時に、付近にあった石造物を埋めたと考えられるが、宝珠の下に合ったと思われる石造物の部位は出土していない。一緒に出土している砾は接合できず、また、水鉢もほぼ中央部で割られているが、残りの半分は出土していない。土器・陶器類は古墳時代の須恵器甕が出土しているが混入した物であろう。

3. 井戸址 井戸址は2基を検出している。ともに5区から検出され、比較的近い場所に位置する。ともに砾が内部に詰められていた。

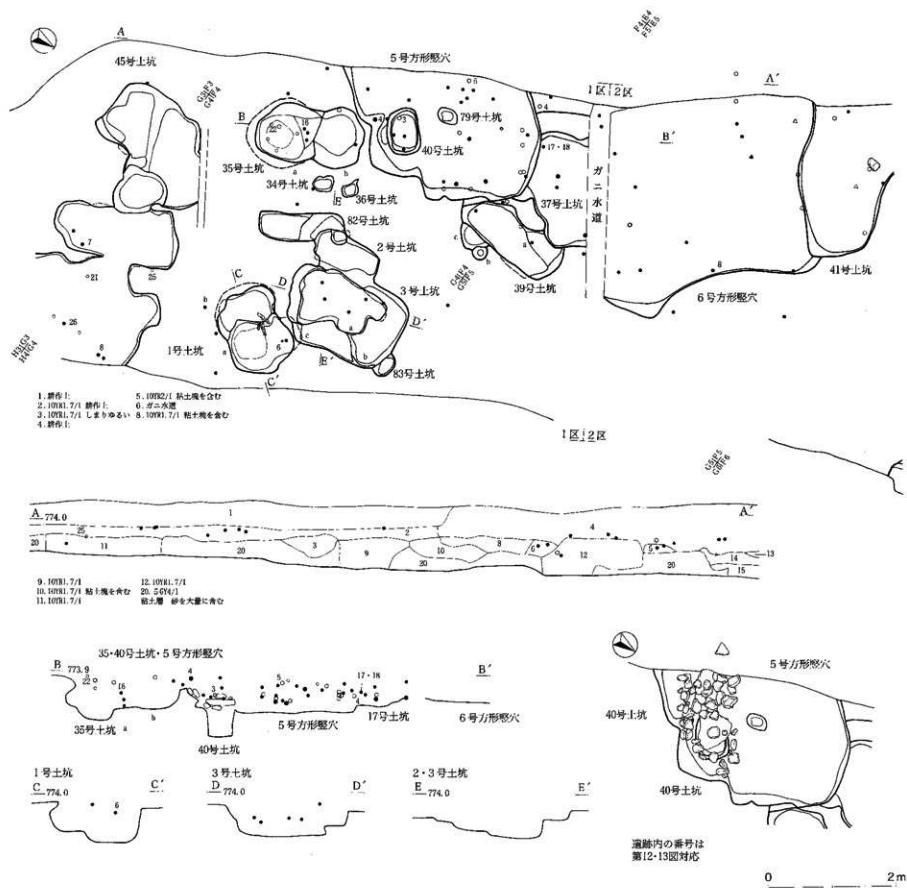
1号井戸址（第9図・図版6-6・7） 5区グリッドN-4に位置する。当初33号土坑とした。遺構の形状が井戸址2と類似すると考えられるところから井戸址とした。土坑の規模は上端長軸118cm・短軸114cm、下端長軸62cm・短軸50cm、深さ96cmの円形である。土坑内には拳大の砾が確認面から42cm下の第4層中まで詰められていた。その下は5層の1層だけであり、砂を含んでいる。遺構上面から内耳土器片2と近世陶器片1を検出しているが、本遺構に伴う遺物かは不明である。他に、遺構内の砾に挟まれる形で先端が範状になっている木が1本出土している（第16図10）。この木製品は先端が4.2cm角で四隅が面取りされており、根元の部分に鋸で切目を入れた痕が残っている。

2号井戸址（第9図・図版7-1～3） グリッドN-5に位置する。当初9号土坑とした。柱穴状のピット22号土坑と重複し22号土坑の方が新しい遺構である。規模は上端長軸156cm・短軸76cm・中段長軸120cm・短軸110cm・下端長軸46cm・短軸38cmである。深さは中段まで75cm、下端まで116cmである。石組み井戸であり、砾面には石垣状に石が整然と積まれている。中央部には乱雑に砾が詰められていたが、砾面の砾とともに中段までしか砾ではなく、中段以下の土壇状になっている部分には砾は詰められていなかった。この砾の最下層から棒状の木が出土した。この木には加工が加えられておらず、自然木と思われる。出土遺物には、砾の間から内耳土器片と大窓期瀬戸灰釉罐反皿（第16図3）・搞き石（第16図9）がある。遺構の時期は大窓期の灰釉罐反皿が出土しているところから、16世紀の遺構と考えられる。

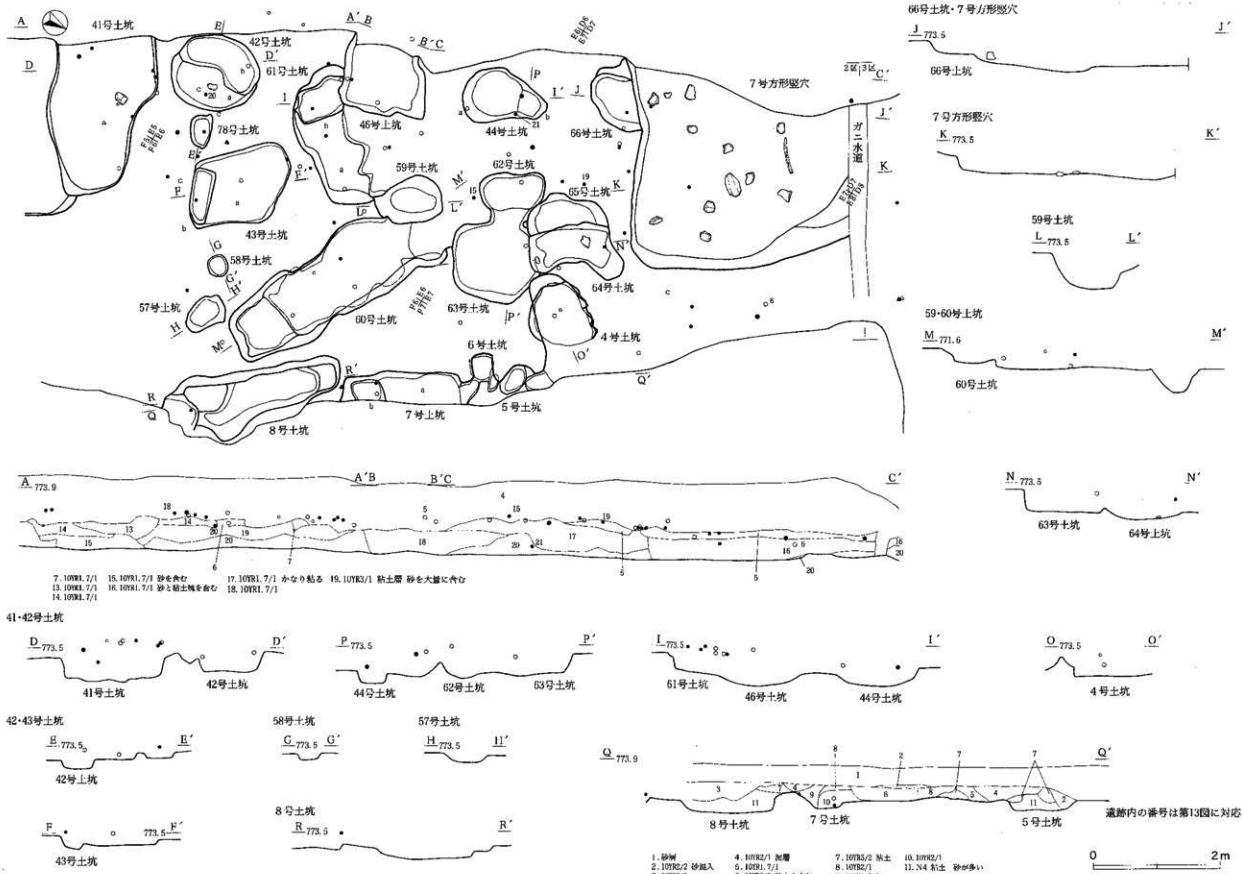
4. 捣立柱建物址（第5図・図版2-2・3） 西方堂址グリッドH-1・2・G-2に位置する。木柱が7本検出されており、木柱が並ぶことから、近世の西方堂であると考えられる。おそらく1棟だと思われるが、B・Cは2本並んで検出されており、建て替えなどが行われていたのではないかと思われる。木柱は6層以下には同一レベルで検出されているところから、西方堂を建て替える時に、地表に出ていた木柱を切り、地面の中にあった部分が残っていたと考えられる。調査区が狭いため、すべての木柱が検出されたわけではない。柱の間隔はA-Bが222cm・B-Dが198cm・A-Eが216cm・D-Fが150cm・F-Gが150cmである。柱間が非常にまちまちでありBに対応する柱は見つかっていない。柱の大きさはいずれも15cmから20cm



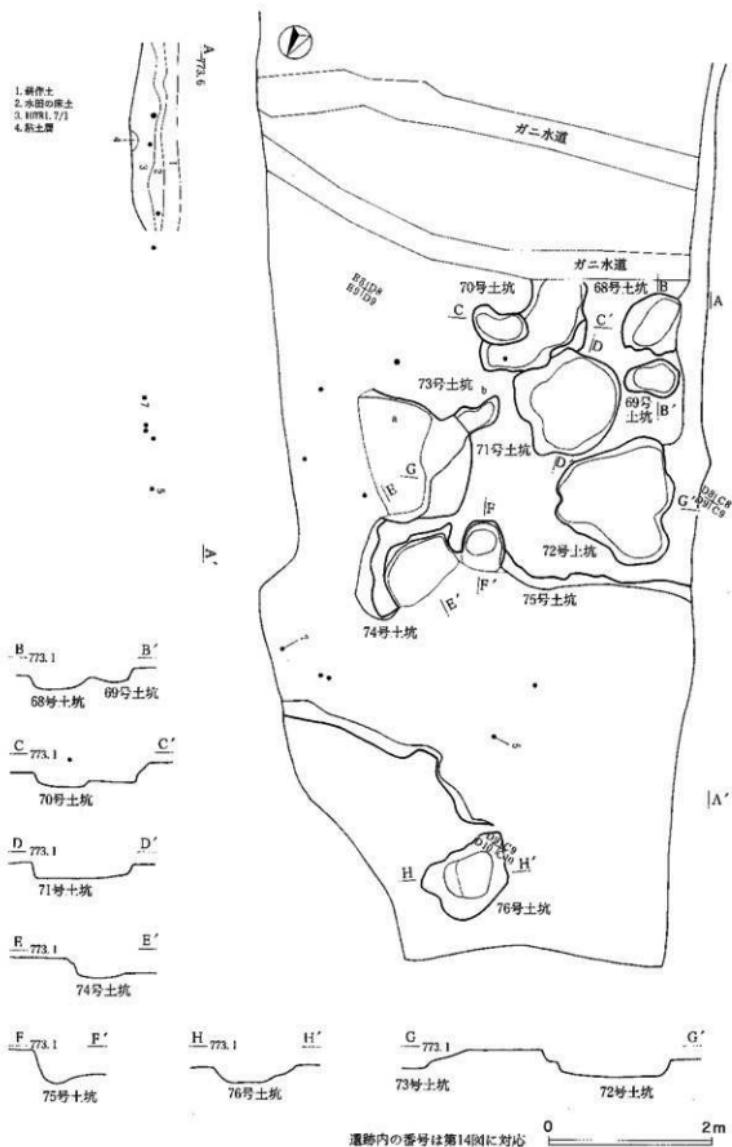
第5図 西方堂址遺構



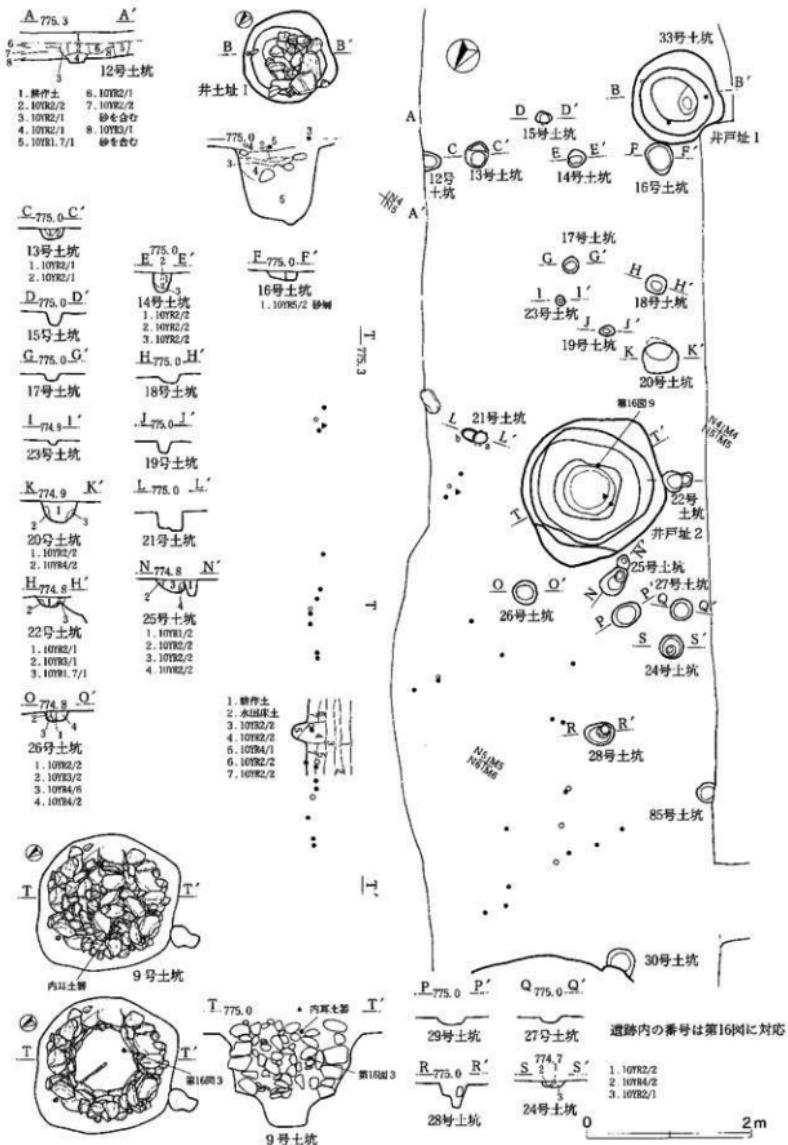
第6図 1・2区検出遺構



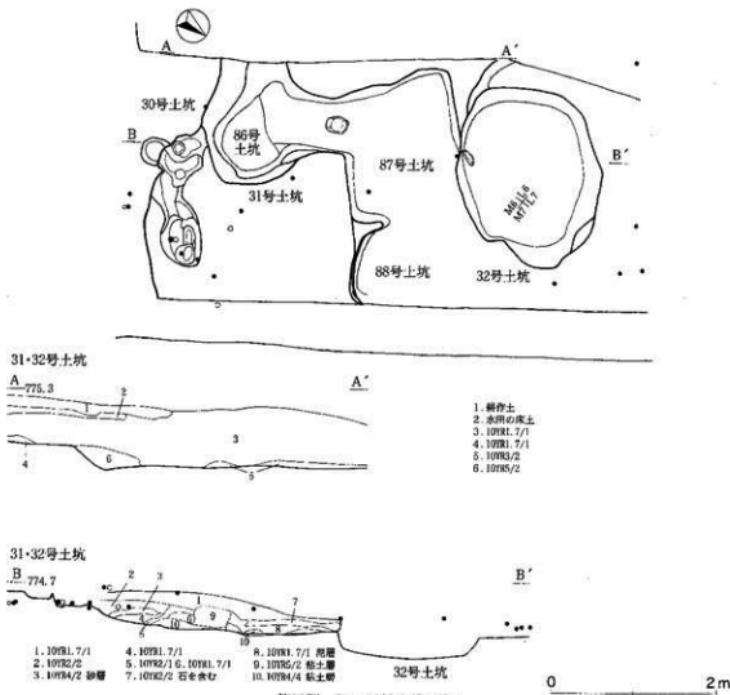
第7図 2区検出遺構



第8図 3区遺構図



第9図 9号土坑ほか



第10図 31・32号土坑ほか

角の角柱である。残っている柱の長さは30cmから70cmほどで、下の地盤の堅さによって長さが異なっていると思われ、方形竖穴と重複するA・B・C・Dは長くなっている。木柱AとFの下部には上坑があり、Aの土坑を77号土坑、Fの土坑を56号土坑とした。77号は不整形に掘られた土坑であるが、56号は柱の大きさに合わせて掘られている。

5. 墓 西方堂址グリッドI-0・1からまとまって3基の墓壙が検出されている。

1号墓（第5図・図版2-4-7） 1号墓は桶形木棺（早桶）で、口径60cm・深さ51cmの木の桶に、無処理の人骨（土葬）1体分とともに出土した。桶の蓋は後世の盛土のためか、中に落ち込んでいた。桶の外部に葬送の時に使用した幡を吊した竿と一緒に埋められていた（図版2-7）。人骨の残りは良好で、頭髪や内臓は検出されず、骨のみが出土した。蹲る姿勢で納棺され、頭が下に落ちていた。頭の位置は北側である。内部から六文銭・数珠玉が副葬されていた。六文銭はすべて寛永通宝である。数珠玉は全部で154個出土している。その内訳は、水晶製3個・ガラス玉3個・木製148個である。木製の物は大きさで3種類に分けられる。水晶玉は1.2cm大の大きさで、断面は扁平である。ガラス製は1cm程であり、断面は球形に近い。木製の物は1cm大の物が97個と最も多く（a）、次いで1.1cm～1.4cmが43個（b）、1.4cm～1.8cmが8個（c）である。aの形状は円形で中心に大きな穴が開けられており、断面は扁平である。bの形状は楕円形で先端が若干尖っており、断面は扁平である。cは基本的には球状であるが、中には若干扁平な物がある。栗の実が多く

内部から出土した。

2号墓（第5図・図版3-1～3） 2号墓は直方体箱式木棺（長方形の箱棺）とともに無処理の人骨1体分が出土した。棺桶の大きさは、長辺84cm、短辺51cm、深さ33cmの小型である。蓋は土圧で中へ落ちていた。内部から人骨が検出されたが、頭髪や内臓の検出はなかった。しかし、最も臭いが強かった。体を折り疊んで横向きに寝た姿勢で納棺されていた。頭蓋骨は棺の北隅に位置していたが、頭蓋骨の下部が上を向いていたため、不自然な形で検出された。棺桶を取り上げたところ、棺桶の下から縄の破片が見つかっており、この棺桶が縄で縛られて埋められていたことがわかった。内部から六文銭と数珠玉・煙管・煙草入れの金具の一部と金糸が副葬されていた。いずれも頭蓋骨の西側から検出された。六文銭はすべて寛永通宝である。煙管は雁首と吸口が完形で、羅字が若干残っていた。雁首と吸口には金メッキが施されていた。また、煙草入れの金具と思われる遺物にも金メッキが施されている。他に数珠玉が39個出土している。数珠玉は木製のみで大きさは0.9cm～1.1cmで小振りである。形状は円形と楕円形であるが、遺体の腐食が激しいせいか数珠玉も腐食しており、形状が崩れている物も見られる。

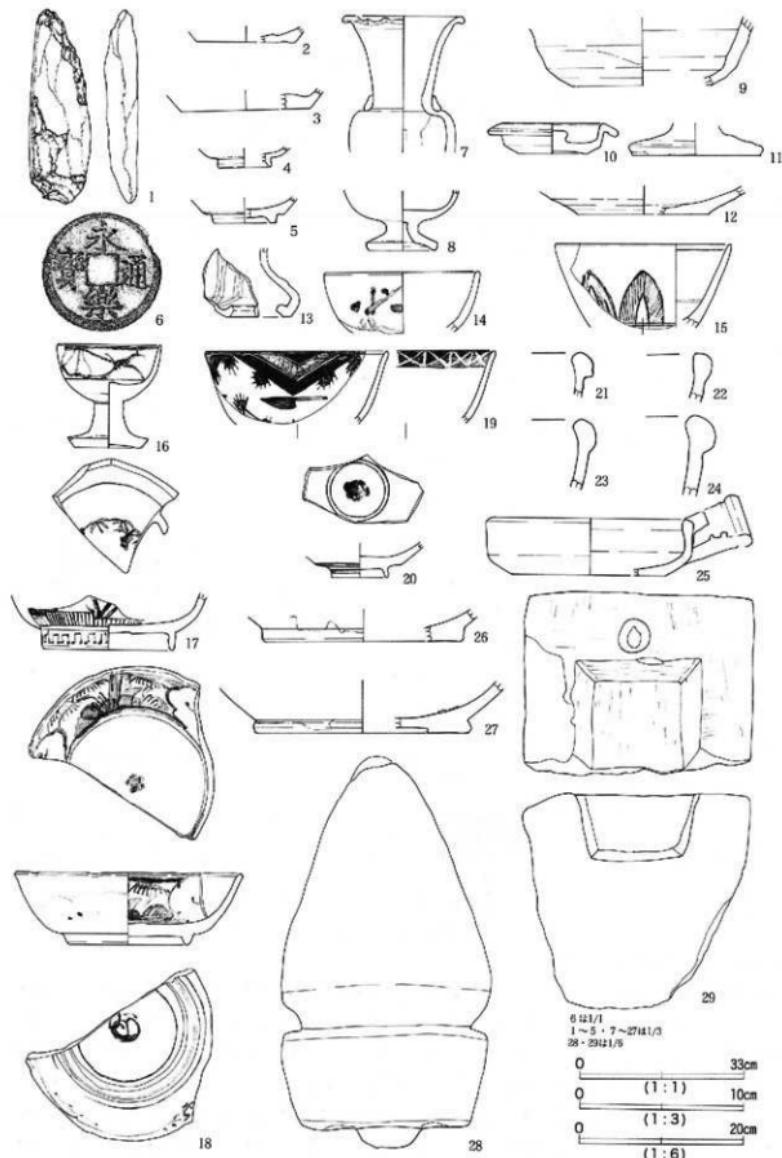
3号墓（第5図・図版3-4～8） 3号墓は桶形木棺で、無処理の人骨1体分とともに出土した。棺桶の大きさは口徑63cm・深さ51cmである。蓋は土圧で中に落ち込んでいた。中から人骨が検出されたが、蹲る姿勢で納棺されていた。頭髪や内臓の出土はなかった。頭蓋骨は南側から検出された。棺桶外部から木札が一枚出土している。木札には両面墨書きがある。1面は「十方任土中□□」（図版3-7）、2面は「法雷門□□□」（図版3-8）とほとんど読めないが、何かの経文であろうか。内部から六文銭と数珠玉・煙管が出土している。六文銭はすべて寛永通宝である。数珠玉は水晶玉1個・ガラス製2個・木製の玉80個である。水晶玉は1.4cmで大きく、1号墓に較べて透明度が高い。断面形は若干扁平である。ガラス玉は1.2cmと若干大きい。断面形は球状である。木製の玉は3種類あり、1種類は65個（a）で次いで11個（b）・4個（c）である。aは円形で断面形が扁平の物で、1.3cmと大きい。bは1.3cmで断面形は球形である。cは0.6cm～0.8cmの小振りな物で他の数珠と異なり、表面に加工した面が残っている。断面は球状である。煙管は雁首・羅字・吸口すべてが揃っている。羅字は竹で作られている。吸口には若干金メッキが残存していた。また、栗がかなり多く内部から出土している。

第3節 発掘された遺物

遺物の総点数は1,458点である。その内訳を時代別に見ると、縄文時代21点・弥生時代9点・弥生時代か古墳時代3点・古墳時代126点・平安時代46点・中世556点・近世193点・中世か近世と思われる火打ち石45点・時期不明土器456点・その他3点で、最も多いのが中世の遺物である。以下、時期別に詳細を見ていきたい。

1. 縄文時代 縄文時代の遺物は少なく、土器はいずれも破片のみであった。内訳は土器3点・石器19点である。土器で図示できたのは2区で出土した1点だけである（第15図1）。この遺物は40号土坑から出土し、縄文が施文されており、縄文中期後葉の土器と考えられる。石器では緑色岩製の打製石斧（第11図1）1点と黒曜石18点が出土している。黒曜石の中には石鏃が3点含まれている。第12図1は17.8mmの円脚鏃であり完形である。第12図2は17.7mmの三角鏃、第13図3の石鏃は無基盤で鏃下部が抉れる三角鏃である。大きさは13.9mmである。遺物の検出位置は、西方宝塚・1・2・5区と遺跡の南東側に偏在している。可能性としては南東区の南東側に縄文時代の何らかの遺構があったのではないかと考えられる。

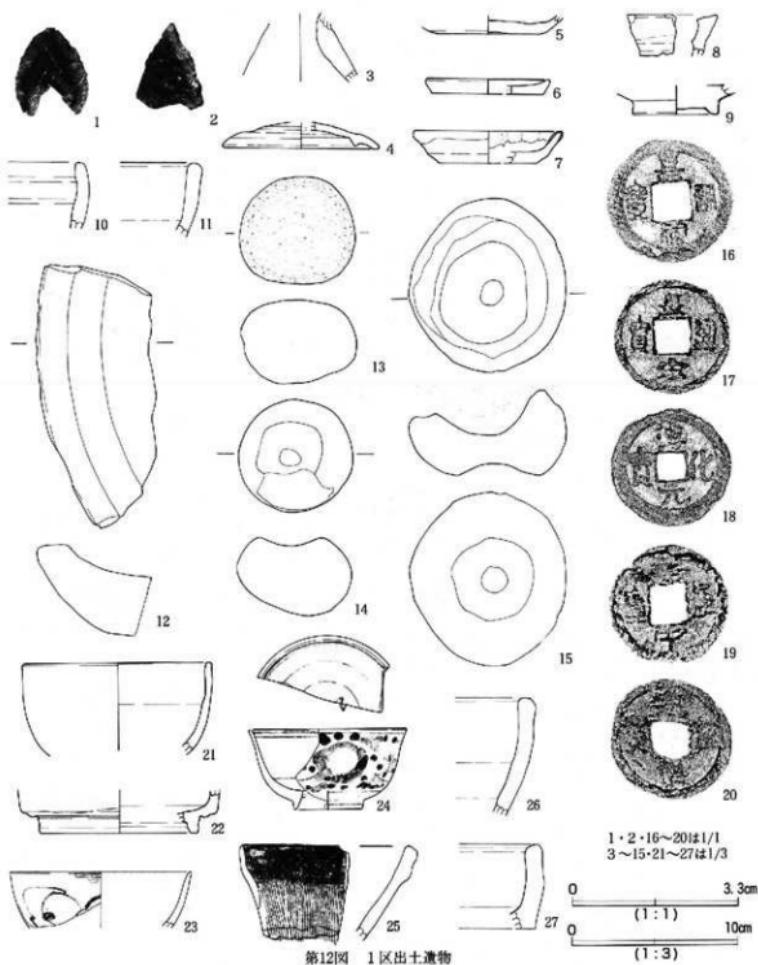
2. 弥生時代 土器が9点出土しているのみで、石器は出土していない。土器は細かい破片が多く、図示できる物は2点しかなかった。第13図2と第16図1は波状文が全体に施文されている。第13図2は蓋の肩部、



第11図 西方堂址出土遺物

6421/1
 1~5・7~2741/3
 28~2941/5

0	33cm
0	(1:1) 10cm
0	(1:3) 20cm
0	(1:6)



第12図 1区出土遺物

1・2・16～20は1/1
3～15・21～27は1/3

第16図1は壺の腹部と考えられる。

3. 古墳時代 古墳時代の遺物は126点とかなり多い。内訳は、土師器51点・須恵器75点である。土師器は壺10点・高壺8点・壺の蓋1点・塙2点・小形壺1点・甕18点・器種不明11点で、須恵器は壺15点・高壺1点・蓋10点・脚台2点・小瓶2点・瓶8点・壺3点・甕29点・広口甕1点・器種不明4点である。細片が多く、実測できたのは10点である。土師器の高壺は1区と3区で確認した。ともに高壺の足の部分で、3区の第14図1では体部を削った痕が確認できたが、1区出土の第12図3は磨滅が激しく、成形痕は確認できなかつた。1区の方が器壁が厚く下部が広がっている。胎土はパウダー状である。壺は2区と3区で出土した物を図示した。2区から出土した第13図4は口径がやや狭く、器体が立ち、口縁部がラッパ状に広がる。体

部の中央部には内外面ともに縦が付く器形である。第14図2は3区から出土し、第13図4よりは口径が広い。器形は前者と同じである。両者とも磨滅により器面の成形痕は確認できなかった。須恵器の壺は4区から出土した物を図示した(第15図1)。器形は口縁部に向かって広がる器形で、口唇部には蓋の受け口が作られている。須恵器蓋は1区と2区とで出土した物を図示した。1区出土の第12図4は直径が狭く、蓋の中程に一段段が付いている。つまみの部分は発見されなかった。直径の狭さに較べて、内部の壺を受ける部分は比較的大きい。須恵器小瓶は2区で出土した物を図示した(第13図6・7)。6は小瓶の頸部と思われ、2条の沈線が横方向に施文されている。7は6より大振りで、頭部が垂直に立っている。須恵器甕は3区で出土した物を図示した。内外面とも当て具痕がある。内面は同心円の当て具を使用し、外面は刷毛目である(第14図3)。須恵器合は4区で出土した物を図示した(第15図2)。形態から器台であると考えられるが、どのような器の器台かはわからなかった。

古墳時代の遺物は遺跡のはば全面で出土しており、もともと古墳時代の遺構があったことが推定できる。器種では壺と甕類が多く、土師器甕の破片も多いところから、生活域が形成されていた可能性がある。

4. 平安時代 平安時代の遺物は46点と数が少ない。内訳は土師器16点・黒色土器15点・須恵器1点・灰釉陶器14点である。土師器は壺4点・甕7点・羽口1点・器種不明4点、黒色土器は壺11点・器種不明4点、須恵器は器種不明1点、灰釉陶器は甕3点・瓶4点・甕1点・不明6点である。灰釉陶器の多くは折戸53号窯式から東山72号窯式のものが多いが、少量ながら古手の灰釉陶器らしき物も出土している。しかし、小破片のため詳細は不明である。遺物の出土量が少なかったため、図示できたのは3点にとどまった。第13図8は灰釉陶器の柄である。釉は薄緑色でガラス質になっていて焼成は良好である。高台は高めで外側に縦が付き内溝する。第17図1は灰釉陶器の瓶と考えられる。頭部から口縁部に向かって朝顔状に開き、口唇部は直立するが、途中で凹んでいる。灰釉はかかっているが、白くガラス質にはなっていない。第14図4は灰釉陶器の甕と考えられるが、高台部の処理が非常に粗雑で、粘土が付着していたり、刻み目がされている。外部に釉が確認できないが、内底部には釉が溜まって、緑色でガラス質になっていた。

5. 中世 中世の遺物は最も多く、556点にのぼる。そのうち、土器・陶磁器542点・石製品6点・木製品1点・銭7枚である。木製品については1号井戸址で述べた。

土器・陶磁器 土器・陶磁器は前述通り542点で、その内訳を見ると、カワラケ224点(41%)・内耳土器209点(39%)・陶器63点(12%)・磁器16点(3%)・須恵器2点(1%以下)・瓦器1点(1%以下)・常滑・中津川の甕10点(2%)・その他器種不明十器17点(3%)である。

(1)カワラケ カワラケは手捏ねカワラケとロクロ挽きカワラケに分けられる。手捏ねカワラケは2点のみで、大部分はロクロ挽きカワラケである。底部はすべて糸切りが残る。小片ばかりで図示できる遺物はない。ロクロ挽きのカワラケは皿状で器高が10mmから13mmのaと、aより若干器高が高い18mmのb、完形の遺物がないので器高はわからないが、深振りになると思われるcの3種類に大別できる。大きさは様々である。aのカワラケで図示したものは以下の3点であり、第13図10は器高10mmで口径58mm、第12図6は器高10mmで口径78mm、第13図11は器高13mmで口径91mmである。出土地点は、第13図10は2区・第12図6は1区1号土坑・第13図11は2区8号土坑である。第12図7はbのカワラケに属すると思われ、器高が18mmで口径94mmで、口縁部からカワラケ胴部中程までタールが付着している。このことから灯明皿であると思われる。1区から出土している。cのカワラケは第11図3と第12図5があり、内底部が中心に向かって凸になっている。底径しかわからないが、第11図3は88mm、第12図5は110mmで大振りのカワラケである。第11図3は西方堂址、第12図5は2区から出土している。手捏ねカワラケは西方堂と1区でしか検出されておらず、偏在している。ロク

口挽きカワラケは遺跡のほぼ全域から出土している。

(2)内耳土器 内耳土器は209点出土しており、カワラケに次いで多い。ほとんどが腹部の小片のみで、口縁部は5点しか出土していない。図示できたのは5点である。これを分類すると3種類に分類できる。

a. 成形痕があまり明瞭ではなく、下部が若干窄まる第12図11

b. 成形痕があまり明瞭ではなく口唇部が丸みを帯び、頸部に段が付く第15図4

c. 成形痕が明瞭で、内外面とも口縁部付近に沈線状に段が付き、頸部が段になり、口唇部が水平で、口縁部が垂直か内湾する第12図10・第16図5・6

内耳上器の出土地点を見ると、遺跡のほぼ全域から出土している。

(3)陶器 陶器の内訳は、山茶碗6点・古瀬戸鉢皿2点・古瀬戸鉄釉香炉2・天目茶碗3・器種不明鉄釉陶器1・大窯期丸皿・丸碗など33点、捏ね鉢11点、東濃製灰釉瓶1点、産地不明陶器2点である。

山茶碗で図示したのは2点である。ともに小振りの小皿で底部は糸切りが残り、胎土は灰色である(第13図14・15)。

古瀬戸に属すると思われる陶器は鉢皿2点と天目茶碗3点である。図示したのは、鉢皿は第13図16、天目茶碗は第13図17・第14図7である。第14図7は被熱を受けた痕が見られた。

大窯期の遺物が最も多く、丸皿類が多い。ほとんどが灰釉であるが、長石釉が1点ある。図示した丸皿は第13図23・24・第14図5・第15図3・第16図3である。いずれも外底部まで釉がかかっており、濃緑色で厚くガラス質になっている。器形の全体がわかるのは第14図5だけである。第14図5は3区から出土し、体部は口縁部に向かって直線状に開き、口縁部に反りは見られない。第15図3は4区から出土し、内底部中央に花文のスタンプがある。第16図3は口縁部が外側に反る反り皿である。2号井戸址から出土している。口径が84mmと狭い。第13図24は他の灰釉皿に較べて底径が広い。皿の他に碗が出土しており第13図22と第14図6・第16図4を図示した。第13図22は2区から出土し、底径3cmでかなり小型である。外底部は釉がかかっておらず、糸切り痕は消されている。第14図6は前者より底径が広い。高台下は釉剥ぎがされている。第16図4は器形の立ち上がりがよく見える。高台下は釉剥ぎがされている。遺物の部分しかないと、時期が明確になるものは少ないが、第14図5と第15図3は大窯第2段階後半(16世紀前半)に位置づけられると思われる。

鉄釉の陶器は前述した天目茶碗の他、第12図8と第14図8を図示した。第12図8は香炉の腹部と思われる。釉は漬けがけであると見られる。第14図8は器種不明の鉄釉陶器で、器厚は厚く、口縁部が最も厚くなり、途中で屈曲している。釉は漬けがけであると見られる。

捏ね鉢は11点出土しており、いずれも瀬戸・美濃系の捏ね鉢と考えられる。図示したのは2区42号土坑から出土した第13図20と2区から出土した21、3区から出土した第14図9を図示した。胎土はいずれも灰白色で、高台は外反する。また、胎土中に長石を多く含んでいる。第13図20の高台は一部打ち欠いたような痕跡が認められた。

(4)磁器 磁器は16点出土しているが、白磁第IV類は平安時代から中世にかけての遺物であるので、便宜上中世に含めた。白磁第IV類は3点・青磁10点・青白磁1点・青花2点である。白磁第IV類で図示したものは第13図9と第16図2である。青磁で図示したのは3点である。第12図9は碗の底部と考えられる。器厚は厚い。高台の接地点と外底部には施釉がされていない。第13図18は龍泉窯系の鷺邊弁文の碗で、若干後が緩くなっている。19は小碗で、中央部に花の模様が陽刻されている。高台の接地するところは釉剥げがされている。青磁はいずれも中国宋代(13世紀から14世紀)の龍泉窯で産出されたものであろう。青花は2点しか出土しておらず、第17図2を図示した。外面・内面とも青絵で絵付けがされており、草花模様が描かれている。器

種は小皿である。時期は中国明代（16世紀）の青花であると思われる。

石製品 石製品と思われる遺物は、茶白下白の受け皿の一部が1点、撲き石3点・丸石2点である。茶白の一部は1区から出土している（第12図12）。撲き石2点は2区40号土坑の集石中から出土している。第12図14は69mm、15は106mmの円形で、14は片面のみ窪んでいるが、15は両面窪んでいる。石材はいずれも安山岩と思われる。第16図9は2号井戸址の集石の中から出土した。丸石は第12図13が1区から、第16図8が5区から出土している。前者は66mmで断面形は扁平である。後者は36mmで小型である。

銭貨 中世の銭貨は7枚出土した。西方堂の2号墓櫛周辺から永楽通宝1枚が出土している。1区は35号土坑から嘉祐通宝1枚、37号土坑から淳化元宝と皇宋通宝が重なった状態で出土している。2区の4号土坑からは天禧通宝が1枚出土している。他に1区から2枚銭貨が出土しているが、破損が激しくて判読不能である。

6. 近世

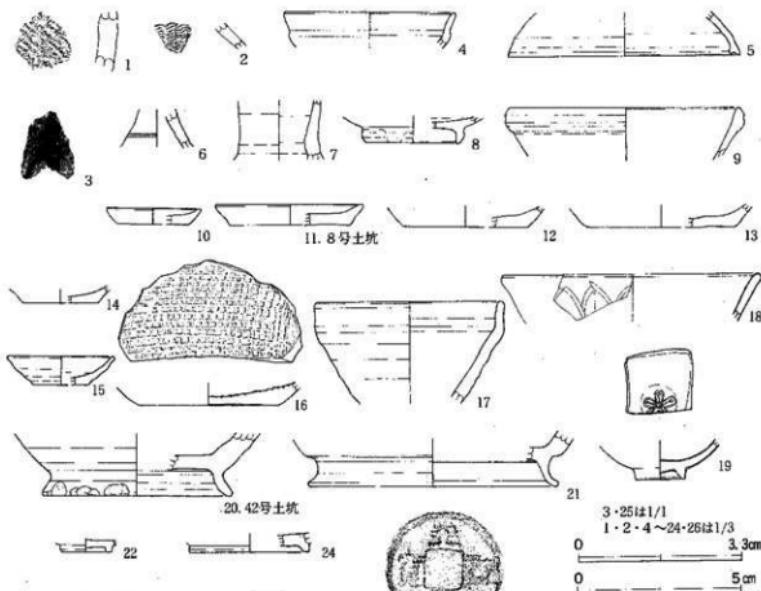
近世の遺物は全部で193点出土しており、その内訳は陶器138点・磁器53点・上器2点・瓦器1点・石皿1点・その他2点である。近世の遺物は遺跡の全域から出土しているが、特に多いのは西方堂址である。また、墓の副葬品については墓の項目で述べたので、こここの数には入っていない。棺桶の蓋が土圧で落ちたときに混入したと思われる遺物については本項で扱う。

西方堂址（第11図） 近世の遺物は墓周辺の道路際に集中して検出された。西方堂址を埋めた際に、西方堂にあった陶器類を廃棄したのではないかと思われる。図示できた遺物は第11図の24点である。4・5は瀬戸の本窯焼きである。4は灰釉が潰けがけしており、高台部と外底部には施釉はされていない。5は碗で、長石釉がかかっている。7は仏花瓶、8は仏龕具で、お堂らしく仏教関係の遺物である。7は肩部で窄まり、首部は口縁部に向かってラッパ状に広がっている。肩部には突起が2ヶ所あるが、本来この突起に穴を開け、環が通されるはずであるが、退化して突起だけになっている。口縁部は打ち欠かれていた。外面は全面に白い長石釉がかけられているが、あまり均質ではない。8は灰釉がかけられているが、高台内部には釉がかけられていない。高台の形状は踏ん張るように広がっている。13の白磁は墓3周辺で出土している。器の内部には低い隆蒂で縱方向に模様が付けられており、これも仏教関係の遺物であると思われる。接続する部分には釉剥ぎがされている。10・11・12は鉄釉の陶器で、10は急須の蓋であろうか。蓋の底部はロクロ窓削りできれいに調整がされている。底部に施釉はされていない。11は何かの台の部分と思われ、底部はロクロ窓削りできれいに調整がされている。底部に釉はかけられていない。12は鉄釉の皿と思われ、外面とも施釉されている。底部はロクロ窓削りできれいに調整がされているが、釉はかけられていない。14は瀬戸製の陶器染付の小巾と考えられ、外面に草木文が描かれている。18世紀後半の遺物と考えられる。15は瀬戸窯の青絵の磁器の広東碗で外部に木の葉文が描かれている。この遺物の時期は19世紀前半と考えられる。

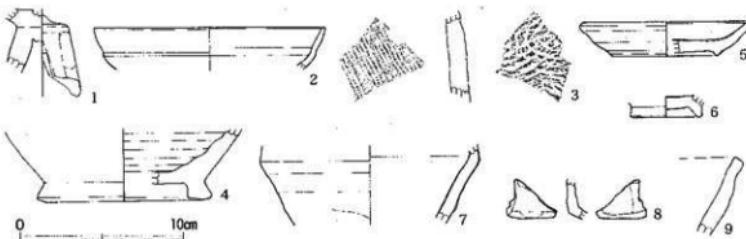
16から20は肥前系の磁器である。16は磁器の仏龕具である。青絵の半菊文が外面に描かれている。釉は台の稜の辺りまで施釉されていて、その下には化粧した粘土が見えている。絵付け方法は手描きと思われる。

17は磁器の皿で高台がやや高い。模様は青絵で描かれており、内面は桜模様、外面は格子に草木模様、高台部に雷文らしい模様が描かれている。絵付け方法は手描きと考えられる。18は磁器の皿で模様は青絵である。胎土は白い。模様は外面に唐草文、内面に松竹文と中央に梅模様がある。絵付け方法はこんなにやく判であると思われる。時期は18世紀と考えられる。19は口縁部から描かれる三重線の三角形の模様に、終と思われる植物が描かれ、それらの間を魚のようなものが泳ぐか飛ぶといった模様が描かれている。青絵で、絵付けは印版と思われる。

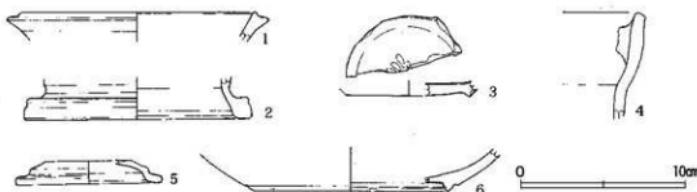
21から24は練り鉢の破片である。いずれも口縁部が玉状に厚くなっているのが特徴である。釉は21～23が灰釉で、



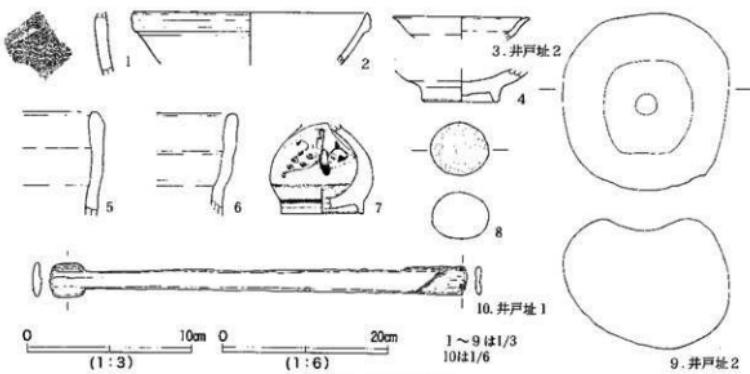
第13圖 2區出土遺物



第14圖 3區出土遺物 (S=1/3)



第15圖 4區出土遺物 (S=1/400)



第16図 5区出土遺物

24が長石軸である。

25は小型の上鍬であり、片方に取っ手が付いている。取っ手の上部は割れていますが内部が空洞になっています。この割れている部分にかけては穴が空いていた痕跡が認められる。取っ手の下部には突起があり、おそらく取っ手の部分には木の棒か何かが差し込まれていて、これを固定するために凹状にくさびを上部の穴から通し、下部の突起に固定させる構造になっていたと考えられる。

1区（第12図） 1区は8点の遺物を図示した。21・第11図9・22は陶器である。21は灰軸の丸瓶で、内部の中程に段が付く。第11図9は天目茶碗で体部は丸みを帯びているが、腰部はロクロを強く当て、少し抉れている。22は長石軸が施釉されている器であるが、器種は不明である。23・24は磁器である。23は磁器染付端反碗であると思われるが、染付の色が灰色の強い青色で産地は不明である。24は瀬戸の磁器染付端反碗である。染付は青絵である。他に、擂り目が密で鉄軸がかかっている擂り鉢（25）・器高が短い土器である焰焰が2点（26・27）出土している。

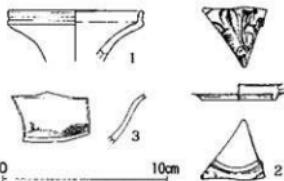
2区（第13図） 26の青磁碗1点を図示した。全面青緑色の釉薬がかけられており、高台の付け根に若干濃く線が一周して描かれている。高台の設置部分は釉剥ぎがされている。産地は不明である。

4区（第15図） 5と6の2点を図示した。5は鉄軸陶器であるが、何らかの蓋と思われる。内面に鉄軸がかけられ、外面は範削り痕が残り施釉がなされていない。6は陶器の鉢である。内部に赤肌色の釉がかけられていて、外部には全く施釉されていない。また、外部にはタールが付着している。

5区（第16図） 7は肥前系の磁器染付の小瓶の胴部である。青絵で絵付けがされており、手描きであると考えられる。人物と草木が描かれている。

グリッド7（第17図） 3は端反皿であろうか、かなり器厚が薄い。青絵で模様が描かれている。

以下、陶磁器の様相を見ていきたい。陶器を見てみると、瀬戸・美濃系103点・地方窯6点・産地不明29点で、圧倒的に瀬戸美濃系の陶器が多い。瀬戸美濃系陶器のうち灰軸が48点と多く、長石軸20点・鉄軸32点・青絵の染付1・鉄絵1・不明2である。主体は灰軸と鉄軸であり、陶器染付も見られる。磁器は肥前系15点・瀬戸美濃系4点・不明34点である。磁器は肥前系の比率が多いが、判断できなかったものも多いため、今後瀬戸美濃系が増える可能性もある。



第Ⅳ章 調査の成果と課題

第1節 中世の上原城下町遺跡の様相

古文書から見た上原 「上原」の初見は嘉禎3年（1237）6月の年号を持つ『祝詞段』（源義8-1）であるが、この史料については成立年代が後世に下がると思われるため、やや信頼の置ける史料を初見史料とする。『大祝職位事書』建武2年（1335）2月9日条であると考えられる（新信史7-81）。ここには「上原神主」の記述が見られ、諏訪上社に奉仕する上原神主の存在が確認できる。以降、たびたび「上原神主」が史料に登場し、『大祝職位事書』には応永4年（1397・信史7-333）条に見られ、『守矢満實書留』には文明3年（1470・信史9-61）・文明4年（同9-79）・文明14年（同9-272）・文明16年条（同9-316）に見られる。『守矢満實書留』文正元年（1466）条には「上原譙方安芸守信満」の記述があり（同9-541）、上原は譙方信満が領有していたことがわかる。室町時代、譙方氏は諏訪上社の人祝である人祝譙方氏と、諏訪地方の世俗的権力者である惣領家とに分裂し、諏訪上社前宮を中心とする大祝譙方家に対し、惣領家は上原を本拠としていた。譙方信満は惣領家の人物である。

『守矢頼真書留』天文11年（1542）条には、上原についてやや詳しい記述がある。天文11年に武田信玄が高遠源方頼經とともに諏訪郡に攻め入った。その時、惣領であった譙方頼重がいた場所が上原であった。その後、譙方頼重が桑原城（諏訪市）に拠点を変えたが、その時に武田方が「五日まち・十日町・上原まち」の「ほりまわり」を「ことことくはう火」したという記述がある（信史11-175）。この段階で上原は町場であったことがわかる。伊藤富雄はこの部分を「上原まちはり」と区切り、「町」は田の区画を称する古代の語で、新豊田の称呼の意味であるとしている（伊藤 1943）。しかし、「五日まち・十日町」とわざわざ列記している所から考えると、「まち」を新豊田の単位とするのは不自然を感じる。これらの三つの「町」に「ほり」というものが存在していた事を考えた方が自然だと考えられる。町を区画するための堀が存在していたのではないかだろうか。

諏訪郡が武田信玄の支配下に入った後、上原は武田信玄の信濃攻略において重要な位置を占めることになる。『高白齋記』によると、天文12年（1543）5月25日条に武田氏の重臣である板垣信方が「上原ノ城ノ鉄立」を行っている（信史11-200）。その後普請が行われ、上原城には「御座建、並御門四つ、城戸」という建物が建てられた（同）。7月13日には長坂上原在城衆が移ったことが記されている（同）。その後、『高白齋記』天文13年4月13日条には「上原ノ地普請終ル」とあり（同11-218）、7月1日条には板垣信方が「諏訪ノ屋敷」の鉄立を行った記述がある（同11-227）。また、譙方上社側の史料である『神使御頭之日記』には、天文13年に「七月五日ニ小城板垣殿屋敷立候」とある（同）。現在でも上原城の中腹に平らな場所があり、ここを「板垣平」とよんでいる。

昭和57年と平成2年にこの板垣平の調査を行ったところ2面の文化層が確認され、上層に造成面、下層に造成面と礎石建物址と石垣が検出された。上層は割合簡単な造成面であったが、下層は版築工法を用いた造成がされていた。出土遺物から上層を武田時代、下層を譙方惣領家時代としている。天文年間の鉄立や普請以前の文化層が検出されたことにより、板垣平に譙方惣領家の居館があったと考えられる（守矢 1991）。

その後、上原には諏訪郡代が置かれたと言われるが、武田氏の支配領域が拡大するとともに上原城の意義が薄れてきたせいか、天文18年1月8日に上原城代だった長坂虎房が、上原から茶臼山城（高島城・諏訪市・信史11-413）に拠点を移動している。しかし、そこで廃城になったわけではなく、天正3年（1575）には

「上原へ参陣」とあるように、軍事的拠点としての性格は失っていなかったと思われる（戦武4-14）。

天正6年（1578）の「武田勝頼朱印状」によると、勝頼は前述の「十日町」に対して伝馬役を勤めれば普請役を免許するという内容の文書を発給した。ここには95名の名前が書き迷ねてあり、軍役衆・当家御一門衆之家人が住んでいたことがわかる。つまり、武田氏の家臣の居住域が十日町の中にあったということになる（信史14-317）。近世になると政治・経済的な中心が高島城下に移り、上原の住人も高島城下に移されたという記録がある（諏義21-123）。

発掘の成果から見た上原 今回の発掘調査では、中世の遺物が556点出土していることにより、中世の遺跡であることが確認できた。また、数は少ないが古瀬戸段階から遺物が確認できた。これにより、諏方惣領家段階からこの地に集落が形成されていたことがわかった。量が多くなるのは、大窯期の遺物が多くなる16世紀以降で、特に板垣信方が入部してきた大窯2段階（1530～1560）に最盛期を迎える。器種を見ると、カワラケと内耳土器が多い。発掘調査ではカワラケ溜まりを確認できず、遺跡内に散布していた。これにより、この場所でのカワラケは祭具と言ふよりも日常的に使用されていた器であると思われる。また、内耳土器の出土量の多さから見て、頻繁に煮炊きが行われていたことが伺え、日常的に居住していた場所であることを伺わせる。

遺構から見ると、5区に見られる掘立柱建物址の柱穴群と井戸址には切り合ひ関係が見られ、井戸が無くなったら後に掘立柱建物址が作られたと思われるところから、何回か聚落の作り替えが行われたと考えられる。掘立柱建物址以外の住居として方形窓穴も考えられるが、水捌けが悪い土地柄、方形窓穴に住めるとは到底思えない。方形窓穴の性格については今後の課題である。遺跡の北側は遺構が稀薄になっていて、現地形でも傾斜が下がっているところから、自然地形によって遺跡が区切られていたことが考えられる。

以上見てきたように、今回の調査は古文書の記述とほぼ一致する結果が得られた。しかし、かなり限定的な調査であり、経済的拠点である「上原」を何えるような成果は得られていない。政治的・経済的拠点だった割には、遺構も遺物も貧弱である感は拭えない。近乍、周辺で開発が行われ、非常に狭い範囲の調査ではあるが調査事例が増えつつある。今後、このような成果を含めて再検討を行う必要がある。

註（）内の「諏義」・「信史」・「新信義」・「戦武」は、「諏訪史料叢書」・「信濃史料」・「新編信濃史料叢書」・「戦国遺文 武田氏編」のことである。また、数字は（巻数-1頁）を表す。

第2節 西方堂址について

記録類から見た西方堂 西方堂に関する文献は管見ではほとんど見つけることができず、諏訪の歴史を網羅している『諏訪史跡要項』にも記載はなかった。享保18年（1733）の『諏訪藩主手元絵図』には西方堂が見え、周辺は田畠になっている。最も記載のあるものは、昭和55年に上原区で建てた立て看板である。以下、全文を掲載する。

「 西方堂跡

諏訪地方では江戸時代初期ごろから諏訪百番札所巡りが盛んとなり、西方堂は諏訪觀音霊場（東三十三番・中三・十四番・西三十三番）のうち、中二番にあたり、上原郷之岡（江戸時代中ごろ）に西方堂がみえている。明治十二年（一八七九）三月、お堂を再建（間口六間、奥行四間）し、念佛講をはじめ村の集会場として、時には催し物も行われるなど広く活用され、村人に親しまれてきた。御詠歌「いく人かごしょうの種を

うへはらの西方淨土ありがたきがな』と記した信心講中のあげた扁額が残されている。お堂の一部は昭和二十三年秋、頬岳寺境内の理昌院跡に移築（本尊阿弥陀仏も合祀）され、西側には菩提樹が茂り、周辺に諸石仏・石碑があつめられている。

昭和五十五年十月 上原区

】

昭和26年頃、矢崎源蔵が書き留めた『永明村寺院仏堂』というノートには、西方堂の所持地についての記述がある。しかし、これを何から写し取ったのか、筆者の矢崎源蔵が「コレハ何ニ因ルノカ」と書いているように不明である。これによると、大町と六句に烟と屢敷の西方免があったことがわかる。また、寺院所持地として、おそらく西方堂周辺と思われるが、播磨小路地籍に田・下畠・屋敷の記述がある。

『茅野市史』中巻には少し記載があり、その一部を掲載すると、「ここには、昭和30年魔堂となり、解体して一部を焼けた理昌院の再建に使用した。本尊は阿弥陀如来であるが、源訪百番観音靈場の中二番であったから当然観世音菩薩も安置されていたはずである。また源訪八十八ヶ所の六十番札所でもあった」とある。

地元の人々の話によると、上原村の「しも（下）」の念佛堂が西方堂で、「わで（上）」の念佛堂が十二坊の薬師堂であるという。

西方堂址には石造物が36基ある。地元の人の話によると、国道20号線を拡幅したときに、道沿いにあった石造物を西方堂に移転したとのことである。地元の郷土史家 矢崎源蔵が書き留めた『永明寺村寺院仏堂』によると、16基の石造物のスケッチがあり、元々どのような石造物が西方堂にあったかがわかる。元々西方堂にあった石造物は地蔵菩薩像、無縫塔、名号塔、伊勢講供養塔、觀音講供養塔、念佛供養塔で、国道沿いから移転した物は馬頭觀音像、如意輪觀音像、二十二夜塔、庚申塔、常夜燈、双体道祖神、丸右である。前述したとおり西方堂は念佛堂として使用され、そのために名号塔や念佛供養塔があるのだろう。西方堂最古の石造物は元禄7年（1694）12月13日の銘を持つ地蔵菩薩像で、17世紀末期までには西方堂があったことがわかる。

発掘の成果から見た西方堂 発掘調査では、西方堂址と思われる掘立柱建物址と、墓3基が検出された。掘立柱建物址は前述したとおり、木柱が検出されたが、調査区が狭いため2間四方しか確認できなかった。この建物址は、周辺から出土した遺物から18世紀には建立されていたと思われる。また、仏花器や仏龕具の出土が見られるところから、明らかに仏教的な遺構があったことを伺わせる。この仏教的遺物から西方堂の址であると判断した。木柱の掘立柱建物址を建て替えるときに盛り土がなされ、新たな西方堂は古い西方堂よりかなり高い位置になっている。その時に元にあった宝珠と水鉢を埋めたと考えられる。墓については石造物の中に無縫塔が3基あり、墓も3基検出されたところから、発掘された墓の墓石が無縫塔なのではないかと推定している。『茅野市史』中巻には西方堂には堂守がいたとの記述があるため、堂守の墓なのではないかと思われる。掘立柱建物址との位置関係であるが、木柱と重複しないところから、西方堂の前庭部に堂守の墓が作られたと考えられる。

第V章 結 語

今回の発掘調査の結果、縄文時代から近世に至る非常に幅広い時期に営まれていた遺跡であることがわかった。

縄文時代は遺跡の南側に遺物が集中し、遺構は検出されなかったが、付近に縄文時代の遺跡があることを伺わせる。弥生時代は少量ながら遺跡全体に遺物が散布する状況であり、稀薄である。古墳時代の遺物が多く、遺跡の全体に遺物が散布している。上原地区一帯は古くから古墳が多く築造されていた場所であることが知られており、永明寺山麓に集中して検出される。本遺跡は、古墳群から見下す位置にあり、これらの古墳を築造した人々の村が、本遺跡などにあったことが想定される。平安時代も遺物の量が非常に少なく、遺構も発見されなかったことから、小規模な遺跡があったことが考えられる。

中世になると飛躍的に遺物の量が増加し、大規模な集落が形成されたことが考えられる。古記録には「上原まち」が早い段階で形成されていた記述がある。中世も戦国時代になると、武田氏の信濃攻略の拠点となつた上原城のお膝元の集落になり、この頃に様々な遺構が作られている。しかし、非常に水捌けの悪い場所であるせいか、「町」を伺わせるような遺構・遺物は見ることはできなかった。戦国時代が終わりを告げ、江戸時代になると、諫訪の中心は上原から高島城のある諫訪市の中心部へ移動した。それ以後、上原地区は農村になったと思われる。

村の念佛堂である西方堂が江戸時代に作られ、その遺構が今回の発掘調査で検出できたのは大きな成果であった。堂守と思われる人々の墓地が西方堂の敷地内から検出され、当時の墓制を考える上で非常に重要な遺構である。西方堂址にある石造物群と今回の発掘調査との関連性を考えていくと、非常に興味深い遺跡であるといえる。

近年、上原地区では開発が進み、小規模ながら発掘調査が行われていて、上原地区的遺跡の状況がわかりつつある。今後これらの成果を加えながら再考していく必要がある。

〈参考文献〉

- ・自治体史
鳥居龍藏 1924 『諏訪史』第一巻上 信濃教育会諏訪部会
茅野市 1986 『茅野市史 上巻 原始・古代』 茅野市
茅野市 1986 『茅野市史 別巻 自然』 茅野市
茅野市 1987 『茅野市史 中巻 中世・近世』 茅野市
諏訪市史編纂委員会 1995 『諏訪市史』上巻 諏訪市
- ・史料集
諏訪史料叢書刊行会 1925 『諏訪史料叢書』 (1985 『復刻 諏訪史料叢書』 ほたる書房)
信濃史料刊行会 1956-1972 『信濃史料』
信濃史料刊行会 1972 『新編信濃史料叢書』第七巻
柴辻俊六・黒田基樹 編 2003 『戦国遺文 武田氏編』第四巻 東京堂出版
- ・発掘調査報告書
守矢昌文 1983 『拂井・阿弥陀堂遺跡』 茅野市教育委員会
守矢昌文 1991 『上原城下町遺跡 - 詳細分布調査報告書』 茅野市教育委員会
茅野市教育委員会 1991 『茅野市遺跡台帳』 茅野市教育委員会
小林深志 1993 『阿弥陀堂遺跡』 茅野市教育委員会
功刀 司 1994 『阿弥陀堂遺跡V』 茅野市教育委員会
茅野市教育委員会 2000 『茅野市遺跡台帳』 茅野市教育委員会
- ・論文など
伊藤富雄 1943 「中世土地制度雑考」『信濃』8・9号合併号
（1981 『伊藤富雄著作集 第三巻 信濃中世土地制度研究』 永井出版企画）
矢崎源藏 1951 『水明村寺院仏堂』 (八ヶ岳博物館蔵) この史料については百瀬一郎氏から教示を得た。
庚申懇話会編 1981/1984再版 『石仏調査ハンドブック』 雄山閣出版
上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁枕の分類」(日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』No.2)
服部 都 1994 「近世瀬戸窯における時期生産の開始と展開」
（『研究紀要』第2輯 瀬戸市埋蔵文化財センター）
山下峰司 1995 「III 4. 灰釉陶器・山茶碗」
山本信夫 1995 「III 11. 貿易陶磁器 (中世前期の貿易陶磁器)」
（中世土器研究会 編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社）
江戸遺跡研究会 編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
九州近世陶磁学会 2001 「第11回九州陶磁学会資料 国内出土の肥前陶磁 一東日本の流通をさぐる」
瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』
瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 『江戸時代の美濃窯』
古泉 弘 2004 「近世窯研究の課題と展望- 基調報告」
（江戸遺跡研究会 編 『墓と埋葬と江戸時代』 古川弘文館）

方形盤六

新番号	旧番号	検出位置	発掘区	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ	重複関係	出土遺物	時期
				長軸	短軸	長軸	短軸					
1	46±	H-1・2	西方堂	374	-	352	-	N-17°W	53	48± 振立柱物址 立柱遺物址	古墳土師器壺1・振立柱器壺1・平安土師器壺1・中世土師器壺1・平安土師器壺1・中世土師器壺1	中世
2	50±	H・G-2	西方堂	312	-	284	-	N-32°W	54	1-3号方形窓穴・掘 立柱遺物址	平安黒色土器壺1	中世
3	51± 3・H-2	西方堂	-	-	-	N-32°W	22	2-4号方形窓穴・掘 立柱遺物址	土師質1・器1			
4	54± 2・3	H・G- F-4	西方堂	210	-	178	(116)	N-27°W	10	方形窓穴3・掘立柱 建物址	平安黒色土器壺1・原出器壺1・壺1・壺2・平安黒色土器壺1・土師質1	中世
5	38±	E・F-5	1区	270	-	251	-	N-36°W	36	37±-38±-40±-78 5号方形窓穴	古墳土師器壺1・中世ガラケ2・内耳1・土師質1	中世
6		E・F-5	2区	(320)	-	(310)	-	N-38°W	5	41-37上 1・中世ガラケ1・古墳土師器壺1・地1・平安1・山茶輪1・蛭ね林1・土師質1	中世	
7	67±	D・E- 7・8	2区	(340)	(268)	(268)	(250)	N-25°W	42	66± 荒生1・器1・中世ガラケ2・内耳1・土師質土器3	中世	

井戸址

新番号	検出位置	発掘区	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ	重複関係	出土遺物	時期	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸						
1	N-4	5区	円形	楕形	118	62	50	N-76°E	96	16± 内耳2・近凹陶器1・木製品1	中世	旧番号33±
2	N-5	5区	円形	楕形	195	170	46	N-9°W	116	22± 内耳1・中世大甕1・木1	中世	旧番号9+.

墓

番号	検出位置	発掘区	平面形		断面形		口径	底径	長軸方向	深さ	出土遺物	時期
			長軸	短軸	長軸	短軸						
1	1-0・1	西方堂	円形	楕	60	-	51	-	45	人骨1体分・窓水道6・敷床玉154・累の実	近世	
2	1-0・1	西方堂	長方形	箱	84	51	84	48	N-25°W	33 人骨1体分・窓水道6・窓管1・焼草入れの金具1・敷床玉39・金糸	近世	
3	1-0	西方堂	円形	楕	63	-	54	-	51	人骨1体分・窓水道6・敷床玉83・窓管1・累の実	近世	

土坑

土坑番号	検出位置	発掘区	平面形	断面形	上端幅員	下端幅員	長軸	短軸	長軸	短軸	長軸方向	深さ	重複測量		出土遺物	時期	備考
													古墳須恵器环片	2	・カワラケ1・内耳4		
1 a G-4	1区	不整形	巾着形	長楕	100	90	50	44	N-53°-W	54	1 b ±					中世	
1 b G-4	1区	不整形	巾着形	長楕	100	90	80	(42)	N-67°-W	46	1 a ±						
2 a G-4	1区	長方形	直形	112	56	102	50	N-12°-W	20	2 b ±						中世	
2 d G-5	1区	長方形	直形	—	—	44	—	38	N-60°-E	6	2 a ±					現代	
3 a G-4	1区	不整形	巾着形	一端	156	76	134	60	N-10°-W	46	3 b ± c ±					中世	
3 b G-4	1区	不整形	巾着形	108	46	86	44	N-18°-W	16	3 a ± b ±							
3 c G-4	1区	不整形	巾着形	128	112	—	—	N-80°-E	12	3 a ± c ±							
4 E-7	2区	不整形	巾着形	(122)	100	104	80	N-32°-E	30	63土							
5 F-7	2区	不整形	柱穴	56	32	40	22	N-85°-E	15								
6 F-7	2区	方形	柱穴	44	32	36	36	N-60°-E									
7 a F-7	2区	方形	圓形	(188)	(48)	(174)	(38)	N-30°-W	18								
7 b F-6・7	2区	方形	圓形	60	(32)	48	(28)	N-11°-W	33								
8 F-6	2区	不整形	不整形	288	90	(238)	58	N-41°-W	42								
12 N-4	5区	椭円形	柱穴	(20)	24	(14)	14	N-54°-E	12								
13 N-4	5区	円形	柱穴	31	28	17	16	N-27°-W	14								
14 N-4	5区	椭円形	柱穴	22	20	14	8	N-0°									
15 N-4	5区	椭円形	柱穴	20	13	14	10	N-45°-E	15								
16 N-4	5区	椭円形	柱穴	40	32	30	26	N-53°-W	11	1井口							
17 N-4	5区	円形	柱穴	20	18	13	10	N-25°-E	8								
18 N-4	5区	椭円形	柱穴	26	23	14	10	N-70°-E	11								
19 N-4	5区	円形	柱穴	18	13	9	9	N-54°-E	14								
20 N-4	5区	円形	柱穴	44	38	25	25	N-57°-E	26								
21 a N-5	5区	椭円形	柱穴	16	13	20	14	N-58°-E	24								
21 b N-5	5区	椭円形	柱穴	(16)	15	(11)	12	N-77°-E	19								
22 N-M-5	5区	椭円形	柱穴	36	26	28	16	N-32°-E	12	2井戸							
23 N-4	5区	椭円形	柱穴	14	10	6	4	N-35°-W	6								
24 M-5	5区	円形	柱穴	30	28	7	6	N-35°-W	6								
25 a N-M-5	5区	椭円形	柱穴	18	14	8	5	N-22°-W	9								
25 b N-M-5	5区	椭円形	柱穴	38	24	(13)	14	N-0°	13								
25 c N-M-5	5区	椭円形	柱穴	15	12	9	8	N-24°-W	8								
26 N-5	5区	円形	柱穴	30	28	20	18	N-33°-E	13								
27 M-5	5区	円形	柱穴	24	23	19	18	N-51°-E	7								
28 M-5	5区	椭円形	柱穴	36	28	25	18	N-50°-E	30								
29 M-5	5区	椭円形	柱穴	37	24	23	20	N-22°-E	9								
30 M-6	5区	円形	柱穴	34	33	24	22	N-49°-E	8								

土器 番号	柱 番号	検出位置	柴振区	平面形	断面形	上端規格	下端規格	長軸 長軸	尾輪 尾輪	長軸 短軸	長軸方向 角度	深さ	重複關係	出土遺物	時期	備考
31	M-6	5区	方形	梯形	120	(76)	76	(76)	N-45°-E	33						
32	M·L-7	5区	隅丸 方形	梯形	222	178	180	144	N-51°-E	36						
34	F·G-4	1区	長方形	柱穴	32	22	28	15	N-40°-W		カワラケ1・土師質土器1					
35 a	F·G-4	1区	円形	巾着形	(94)	92	(68)	58	N-43°-W	70	古墳土師器裏1・内耳1・ 近世陶器4・鏡(轟雷通文)	中世				
35 b	F-4	1区	不整形	梯形	98	64	64	58	N-62°-E	30	カワラケ1	中世				
36	F·G-4	1区	方形	柱穴	36	20	22	14	N-87°-W		平安土師器底1・黒色十字環1・ 五足1・土師質土器2・五足1・鏡(淳化元 宝・點朱通文)	中世				
37	F-4·5	1区			184	(86)	170	(82)	N-48°-E	15	39± 5方堅	カワラケ2・土師質土器4	中世			
39 a	F-4·5	1区	長方形	山瀬形	164	62	148	58	N-9°-E							
39 b	F-4·5	1区	円形	山瀬形	24	22	10	9	N-50°-W							
39 c	F-4	1区	円形	山瀬形	54	—	36	—	N-4°-E		37-38± 5方堅	古墳土師器高不1・カワラケ1・内耳土 器10・撗き石2	中世			
40	F-4	1区	長方形	梯形	74	52	52	38	N-65°-E	51	1・光生土器1・古墳土師器环 1・小輪轂1・平先里1・土師質土器1 1・中世カワラケ1・山本輪2・十輪質 土器4・近世腰前系鉢型1	中世				
41	E·F-5	2区	溝状	盤形	(244)	138	(236)	128	N-68°-E	39	6方堅	古墳土師器高不1・相思器不蓋1・中世 古墳土器1・土師質土器1	中世			
42 a	E-5·6	2区	不整形	皿形	140	—	114	—	N-5°-W	10						
42 b	E-5·6	2区	長方形	皿形	126	54	116	42	N-15°-E	24	繩文土器1・光生土器1・古墳土師器环 1・小輪轂1・平先里1・土師質土器1 1・中世カワラケ1・山本輪2・十輪質 土器4・近世腰前系鉢型1	中世				
43 a	E·F-6	2区	不整形	皿形	188	112	170	102	N-76°-W	16	古墳領芭器瓶1					
43 b	E·F-6	2区	長方形	盤形	94	34	74	24	N-70°-E	20	中世カワラケ1・内耳1・土師質土器1					
44 a	E-6	2区	円形	梯形	(88)	(81)	(74)	69	N-21°-W	32	古墳領芭器蓋1・半安黑色土器杯1					
44 b	E-6·7	2区	方形	梯形	—	(33)	36	33	—	18						
46	E-6	2区	方形	皿形	—	131	—	108	N-12°-W	53	61土	古墳土師器裏1・頸然器不1・カワラケ 1・土師質土器1	中世			
47	H-1	西方堂	不整形	梯形	126	104	100	76	N-57°-E	44	48± 方堅1	古墳領芭器蓋2・石製宝珠1・水沫1	近代			
48	H-1	西方堂	不整形	梯形	132	112	86	82	N-19°-W	37						
49	H-2	西方堂	梯円形	皿形	80	(61)	54	40	N-5°-E	9						
52	H-2	西方堂	梯円形	梯形	(72)	(44)	(60)	(24)	N-59°-E	12	53± 土師質土器1					
53	H-2	西方堂	梯円形	皿形	(50)	67	(40)	42	N-60°-E	23	53±					
55	G-3	西方堂	梯円形	皿形	60	50	46	38	N-40°-E	11						
56	H-2	西方堂	方形	柱穴	30	22	24	21	N-20°-W	21						

土塊 番号	柱 位置	柱山位置	発掘区	平衡形	断面形	上端形状	下端形状	長軸 角度	短軸 角度	深さ	重複關係	出土遺物	時期	備考
57	F-6	2区	横円形	柱穴	皿形	72	46	46	N-77°-W	15				
58	F-6	2区	円形	柱穴	34	30	28	24	N-35°-E	9				
59	E-6	2区	横円形	柱穴	104	70	70	38	N-48°-W	54				
60	E・F-6	2区	溝状	一端山	-	116	-	102	N-63°-W	22				
61 a	E-6	2区	方形	皿形	220	72	68	N-49°-E			古墳須恵器壺1・中世常滑壺1		中世	
61 b	E-6	2区	不整形	斬形	(76)	53	(68)	44	N-51°-W	30	十字削土器壺1		中世	
62	E-6・7	2区	横円形	不整形	104	(54)	94	48	N-33°-W	26	古墳須恵器壺1・中世常滑壺1			
63	E-6・7	2区	隅丸方	温形	146	140	132	120	N-13°-W	34	古墳須恵器壺1・十字削土器1			
64	E-7	2区	長方形	皿形	134	60	96	44	N-38°-W	18	中世椎ね林1・土海貢土器1		中世	
65	E-7	2区	隅丸長	椭形	128	(52)	96	(40)	N-32°-W	62	中世内耳2・十字削土器2		中世	
66	E-7	2区	輪方形	樽形	(96)	78	(74)	60	N-0°	21	中世内耳2・十字削土器2			
68	D-8	3区	隅丸方	樽形	80	68	66	34	N-18°-W	16				
69	D-S	3区	横円形	不整形	68	44	48	30	N-54°-W	17				
70	D-8・9	3区	輪円形	樽形	70	38	56	24	N-80°-W	28				
71	D-8・9	3区	不整形	輪形	140	118	110	90	N-5°-W	19				
72	D-8・9	3区	不整形	樽形	160	134	136	120	N-18°-E	33				
73 a	D-9	3区	方形	樽形	152	-	136	-	N-29°-E	14				
73 b	D-9	3区	不整形	樽形	(52)	26	(44)	18	N-21°-W					
74	D-9	3区	小盤形	不整形	94	-	88	-	N-25°-W	14				
75	D-9	3区	長方形	不整形	62	50	37	28	N-28°-E	40				
76	C・D-	3区	不整形	樽形	120	74	60	50	N-5°-E	11				
77	H-1	四方堂	不整形	-	(58)	67	(40)	54	N-60°-E	48	1万堅	内耳1・近世磁器		
78	E-6	2区	長方形	皿形	50	32	42	24	N-60°-E	9		中世常滑壺1	中世	
79	F-4	1区	長方形	柱穴	36	24	18	14	N-5°-E	5万堅			庄番号38上	
82	G-4	1区	横円形	柱穴	32	(22)	28	16	N-45°-W	2+a・b			庄番号2 b土	
83	G-4	1区	横円形	柱穴	38	22	28	18	N-80°-W				庄番号3土	
85	M-5	5区	円形	柱穴	(22)	24	(15)	14	N-58°-E	40			庄番号35上	
86	M-6	5区	方形	樽形	90	(62)	70	(46)	N-30°-E	24	31±			
87	L・M-6	5区	方形	盤形	(166)	140	(146)	122	N-42°-E	150	31-88±			
88	M-6	5区	方形	樽形	94	-	74	-	N-67°-E	87±				

図 版



(1)上原城下町道路発掘前風景



(2)平成14年度試掘調査風景



(3)グリッド7(東より)



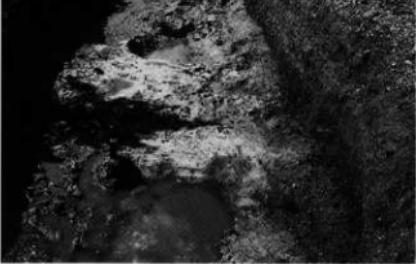
(4)グリッド9(北より)



(5)平成16年度発掘調査後の状況(西より)



(6)5区(東より)



(7)西方塗址～4区全景(南より)

図版2





(1)～(3)
墓 2 出土状況(1)



(2)



(3)



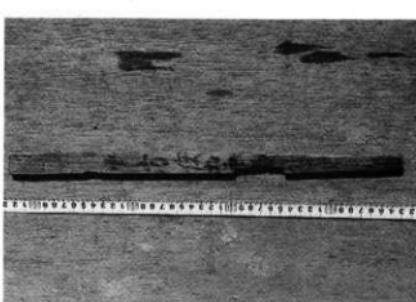
(4)墓 3 (北西より)



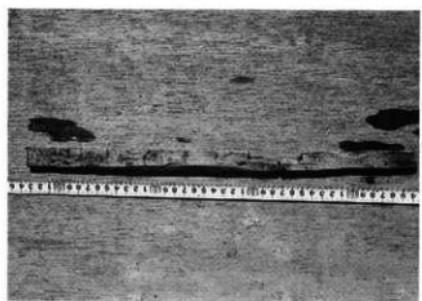
(5)墓 3 (北西より)



(6)墓 3 (北西より)



(7)墓 3 外出土遺物 表面



(8)墓 3 外出土遺物 表面



⑨48号土坑 (西より)



(1)48号土坑（北東より）



(2)47・48号土坑（西より）



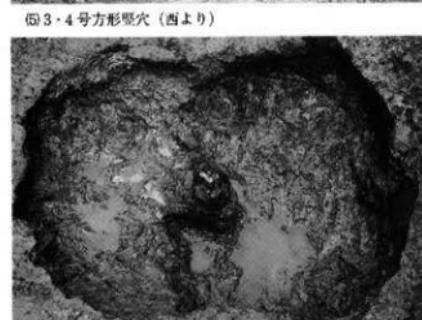
(3)1号方形堅穴（北東より）



(4)2・3・4号方形堅穴（北東より）



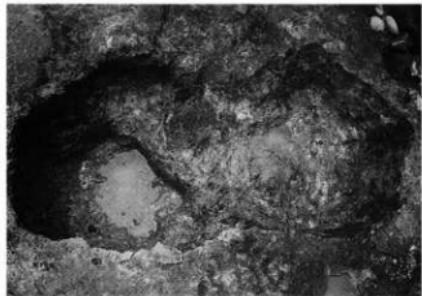
(5)3・4号方形堅穴（西より）



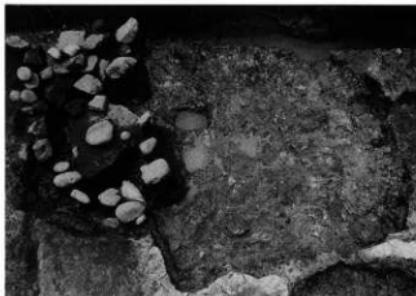
(6)1号土坑（南東より）



(7)35号土坑・5・6号方形堅穴（南東より）



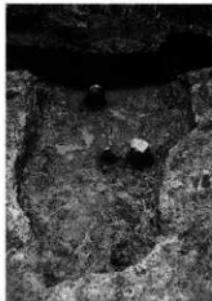
(1) 135号土坑（北東より）



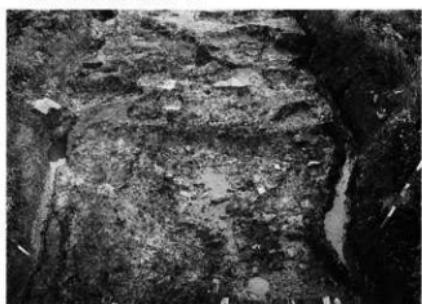
(2) 237・40号土坑 5号方形堅穴（北東より）



(3) 5号方形堅穴（北東より）

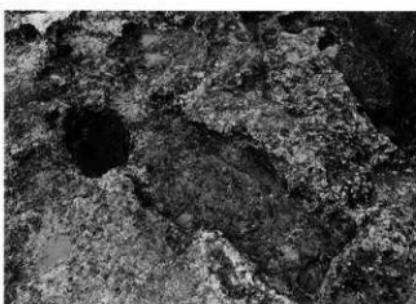


(4) 41号土坑（北東より）



(5) 2区（北西より）

(6) 42・43号土坑
(北西より)



(7) 4号土坑（北西より）

(8) 59・60号土坑（南東より）



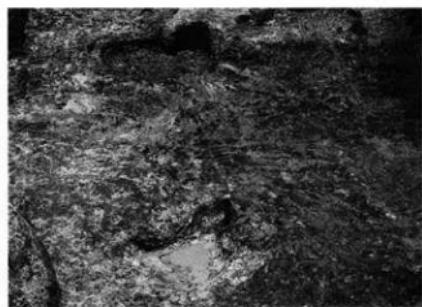
(1) 7号方形堅穴（北西より）



(2) 3区（北西より）



(3) 68~75号土坑（北西より）



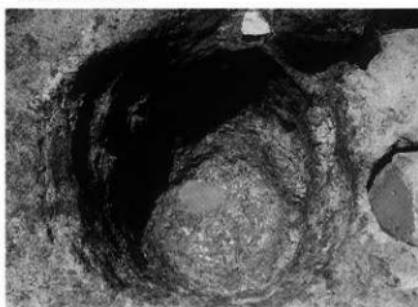
(4) 74号土坑ほか（北西より）



(5) 5区（南東より）



(6) 井戸址1（南より）



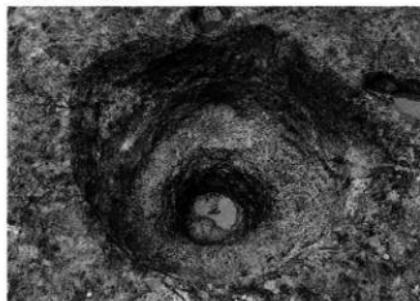
(7) 井戸址1（北東より）



(1)井戸址 2 (北西より)



(2)井戸址 2 (西より)



(3)井戸址 2 (北西より)



(4)30・32号土坑 (北西より)



(5)35号土坑 b 土層 (北東より)



(6)4区 (西より)



(7)表土剥ぎ風景



(8)発掘調査風景

図版8



(1)検出幕法要の様子



(2)検出墓法要の様子



(3)西方堂址の石造物群



(4)西方堂址の石造物群



(5)西方堂址の石造物群



(6)発掘区の横を走る中央東線



(7)発掘に携わった方々



報告書抄録

ふりがな 書名	うえはらじょうかまち いせき 上原城下町遺跡					
副書名	平成16年度茅野市播磨小路上地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書					
編著者名	柳川英司					
編集機関	茅野市教育委員会					
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塙原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101					
発行年月日	西暦2005年3月15日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
うえはら じょうかまち 上原城下町	茅野市 ちの上原	20214 224	36° 0' 24"	138° 08' 31"	2004.04.06 ~ 2004.07.15	茅野市播磨 小路上地区 画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上原城下町	集落址	中世近世	土坑 方形竪穴 柱穴 井戸址 掘立柱建物址 墓	59基 7基 32基 2基 1軒 3基	古墳時代土師器・須恵器 平安時代土師器・黒色土器・灰釉陶器 中世土器陶器・磁器・石製品・木製品 近世陶器・磁器	・武田時代を中心とする上原城の城下町遺跡が検出された。 ・近世の信仰遺跡である西方堂址が発見された。

上原城下町遺跡 発掘調査報告書

—平成16年度茅野市播磨小路上地区面整理事業に伴う発掘調査—

平成17年3月10日 印刷

平成17年3月15日 発行

編集行

茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
(0266) 72-2101㈹

印刷

永明社印刷所
長野県茅野市塚原2丁目12番30号
